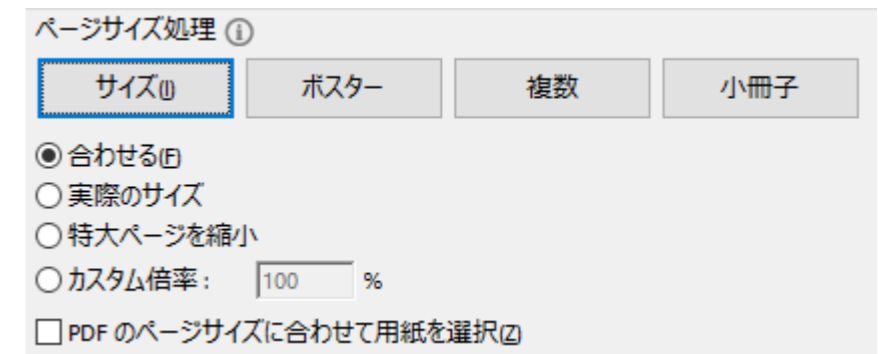


● 武士道 第8版 書写データ

● A3で、「合わせる」設定印刷 →



● 本稿は横方向に

両面テープやテープ糊で貼り合わせ、巻物形式にする想定で作られています。

「武士道」新渡戸稲造 著

日本の未来を考える会広報室 訳

謹書

序文

1890年ごろの事でした。

ベルギーで有名な法学者、ドラブレール教授の自宅で、数日を過ごしていたのですが、2人で散歩している最中、宗教の話題になりました。教授は、

日本の学校教育に、宗教教育が無い事に大変驚き、「それならば、

日本人は子供たちにどの様にして

道德教育を行うのか？」

などの質問責めに遭いました。

私は、その質問について、海外と日本とではここまで観念が違うのかと悟り、愕然し、

すぐに答えることは出来ませんでした。

祖国日本で教育を受けた私としての感想は、

日本人に一貫した道德觀念の形成について、それは一概に、かしこまった学校教育によるものとは言えない、というものであった為です。また、私の妻からも

「なぜ、独特の思想や道德的習慣が、

日本全体に行き渡っているのか？」

という様な質問を幾度と受け、この様なやりとりもあって、今回、長い闘病期間を利用して小著を著す運びになりました。

内容をまとめている内に分かったことは、

日本の道德觀念は、

「封建制」と「武士道」を知らずに、

理解する事は出来ない、という事です。

私の父、十次郎は江戸時代後期の盛岡藩士で、私が若いころは封建制度がまだ盛んでした。

その頃に私が教えられた事を

ここで整理して、

皆様にお伝えできればと思います。

日本について執筆活動を盛んにされる
ラフカディオハーン氏、ヒューフレイザー氏、
アーネストサトウ氏、チェンバレン先生など
偉大な先輩方がいらっしやる中で、
私が日本について、
英語で書くことは気が引ける気もします。
しかし、

私が日本について書く事の利点は、
裁判で言えば、代理人や弁護士ではなく、
被告人の立場を取れる事にあると言えます。

私に諸先輩の様な語学の才能があれば、
より雄弁に日本の事を書けると思う事も
多々ありました。が、
外国語で語る者は、
自分の主張を理解してもらえただけでも
感謝しなければなりません。

この小著全体に渡っての特徴は、
各分野それぞれに、日本の道徳観念に相当する、
欧州の歴史や文学を例として挙げている事です。

この様にする事で、万民に身近なものとして、日本の道徳観念が理解されやすくなったかと思えます。

随所に、特に宗教関連について、

私の表現が侮辱的に取れるようなものが

あるかもしれませんが、

それは、キリスト教そのものに対する

思いではない事をご理解頂けましたらと存じます。

私が問題点を指摘している事は、

昨今のキリスト教会の、

原点からかけ離れたやり方、陰湿な伝導の手法、

本質を欠いた諸々の伝統や形式についてであり、

聖書に記されるイエスご本人の

教えそのものに対するものではありません。

私は、聖書を通して伝えられた

イエスの教えを信仰しており、

また、律法を自分の心に刻んでいます。

旧約聖書は、ユダヤ人、クリスチャンのみならず、

今日では、異邦人に対しても、

神様が与えてくださった契約の書であると

信じています。

私の神学について、

◆人々の上に立つ者が持つべき義務感

武士道とは、

他の花々と違い、最も美しい時に散り、人々に感動を与える「桜」と喩える事が出来ます。

これは古く廃れたものではなく、今なお、私たち日本人の心の中で、力と美の顕現として存在しているものです。

封建制度によって構築された武士道の思想には、具体的に体系化された理念の様なものはありませんが、明治維新を経て封建制が無くなった今も尚、桜の様にほのかな香りを漂わせ、わが国日本人の倫理観の在り方を示し続けてくれています。

アイルランドの歴史家、ジョンミラー博士のような、立派な学者ですら、アジアに対する認識不足で、

「東洋には今も昔も、

騎士道に類する制度は一切無かった。」と著書で断言してはいますが、

この様な無知は、許されるべきものと思います。その著書が出たのは、

ペリー来航による日本開国以前の事だったからです。それから10年を経て、

日本の封建制が崩壊しかかっていた頃、

資本論を著したカールマルクスは、

封建制の利点を指摘すると同時に、

その封建制の活きた形は最早、

日本にしか存在しない。

と述べていたのが印象的でした。

この点については、私もカールマルクスの様に、

ヨーロッパの歴史学者や倫理研究者に、

日本の武士道精神の研究にもっと注力するよう

勧めたいものです。

騎士道：ヨーロッパと、

武士道：日本の封建制の比較研究も魅力的ですが、

その深い研究は本書の目的ではありません。

趣旨は、

- 1) 日本の武士道の起源・源流
- 2) 武士道の特性と教訓
- 3) 民衆が武士道から受けた影響
- 4) その影響がどのように続いていくのか
という点です。

第1番目は簡潔にご紹介するものとし、
でなければ、話が永遠に終わらなくなってしまいます。

第2番目は、
多くの方々の興味を引くものと感じますので、
少し詳細にご紹介出来ればと思っています。
残りはサブ的に扱っていきたいと思います。

さて、「武士道」とは、

高い身分・武士階級の人々にとっての

「掟」といえるものですが、

この言葉にはあまりにも多くのニュアンスが含まれて
います。

ですから、

今までは、英語で *chivalry* (騎士道) と表現していましたが、
ここからは原語の *bushido* (武士道) を

用いたいと思います。

どれだけ翻訳に長けた人でも、国民的な音色を持つ言葉を、

ありのまま他国語で表現する事は出来ません。

◆ 武士たちが胸の内に刻んだ掟

武士の世界に於いて、

教育と道徳の原理を構築してきたのが武士道であり、それは、口伝などによって

語り継がれてきたものでした。

文章として体系化されなかった事によって逆に、武士たちの胸の内に一層深く刻みこまれ、強い拘束力を持つ掟となったのです。

武士道という倫理体系には、

創始者も、源泉と言えるものもありません。

政治分野に於いては、

憲法並みの存在感があった武士道でしたが、マグナカルタや、

人身保護法に該当する様な内容はなく、

武家諸法度を見ても、
道徳的・倫理的な内容は僅かしか書かれていません。
時期的には封建制の始まりと
同時期に芽生え始めたとは言えますので、
武士道とは、

「封建制の時代に於いて、

武士たちの生き様が集約されていき、

醸成され、発展した、自然発生的なもの」である
と言えるでしょう。

そして、

封建制が多くを糸を織りなすように、

複雑な関係が重なって構築されている様に、

武士道も、

あらゆる場面に於ける倫理観念が

複雑に錯綜しているのです。

日本でも、ヨーロッパと同じように、

封建制の始まりと共に、職業軍人が台頭しました。

侍と呼ばれる存在ですが、

「士農工商」と言われるように、

農業、工業、商業など

一般人の上に立つ特権階級にありました。侍たちは、職業柄、猛々しい性格だった事でしょう。それら侍たちが、支配階級の一員として、名誉と特権を持つようになる、統制を取るべく、必然的に、侍の中での共通規範となるものが必要になりました。

医師が、同業者の競争を制限するように、弁護士が問題を起こした時に、査問会にかけられるように、侍もまた、自身の不始末について、最終審判をする基準が必要となったのです。これが、武士道です。

◆侍精神としてあったフェアプレー

ドラマでよく描かれる様な、

「弱きものを虐めず、強き者に屈しない」という、
純粹な子供染みだ心持ち、

これこそが、

あらゆる道徳律の基礎と言えるものです。

あらゆる宗教も、究極的には、

ここを目指していると言えは言い過ぎでしょうか？

「卑怯者」や「臆病者」という言葉は、

正しい人にとって最も侮辱的なレッテルですが、

若い少年は、この観念と共に人生を歩み始めます。

侍も、これと同様です。

年を重ね、社会に出るようになって、

自身の信念を貫き通す為に、

大きな権威や、周りの支持を求めるようになります。

その様な社会の中で、

侍たちが道徳的拘束力無しに、

物事の問題解決を殺し合いだけに頼っていたとすれば、

侍の生活の中から、

「武士道」なる崇高な倫理体系は

誕生しなかった事でしょう。

ヨーロッパに於いて、武士道に該当する騎士道は、

キリスト教を都合よく

利用していた傾向にありましたが、

それでも、

第2章 武士道の成り立ち

◆ 神道と仏教が一体となり、武士道が築かれた。

仏教は、例えば災害の被害などに遭っても、生に執着せず、その試練を甘んじて受け入れる、運命に従う心を培いました。

剣術の師匠、柳生但馬守宗矩

(ヤギユウタジマノカミムネノリ) は、その弟子、徳川家光に対して、「私が教えられるのはここまでだ。

以降は禅の教えに譲る。」

と言ったそうですが、ここに大きな教訓があります。

仏教に於ける禅とは、言語表現の範囲を超えた世界に瞑想で

到達しようとするものであり、これについて、私は、

あらゆる現象の源にある、原理的な絶対的存在と、自分を調和させようとする働きであると捉えています。

この様な視点で見れば、禅はある面、

宗教的教義を超えていると言えます。

その絶対的存在を認識し得た先に、あらゆる世俗を超越して、

「新天新地」を知ることが出来るようになる。というもののなのです。

武士道の形成に当たって、

仏教・禅が足りなかったところは、神道が補いました。

主君への忠誠心、祖先を敬う心、親孝行の心は、神道から来る考え方です。

これによって、武装階級の傲慢な性質に、忍耐の心や、謙讓心が備わり、武士道となったのです。

実は、神道の教えに、「原罪」という概念はありません。墮落前の人間生来の善良さ、

神に似た純粹さをどこまでも信仰し、神の意志が、

その人間の魂に宿るものとして崇めるものなのです。神社に赴くと、

装飾品が他の宗教施設と異なって少なく、

シンプルである事に皆様も気づかれる事と思います。主要なものと言えば、奥殿にある1枚の鏡くらいです。なぜ鏡が置かれるのでしょうか？

鏡には、自分の心を映している、という意味があり、平静で澄んだ心で参拝した時、神に似た純潔な自らの心がそこに映し出され、それこそが神の姿である。という捉え方なのです。

この日本の参拝は、古代ギリシャの「汝、自身を知れ」の教えと共通するものがあります。

外面的な事ではなく、どこまでも内面を追及する、道徳的性質を顧みる内省の事こそが本質です。

ドイツの歴史学者モムゼンは、「ギリシヤ人は礼拝の際に天に目を向け、

ローマ人はベールで顔を覆う。」

と言っており、これは、

黙想的な祈りと、

内省的な祈りの違いを的確に指摘しています。

神道の「自然崇拜」の概念は、我が国日本の国土に対する愛着、自然愛の心を培うものであり、「先祖崇拜」の概念は、家系を辿っていくと、どこかで繋がっている皇室を、国民全体の先祖とし、崇拜する感情を培うものとなっています。海外の人々にとって、国土は資源採掘や農耕など、利益を取る舞台として扱われがちですが、日本に於いては、先祖の霊が宿る神聖な祭壇と捉えられていたのです。これにより、天皇陛下のご存在は、私たち国民にとって、単なる法治国家の長、文化の保護者という次元を超えたあまりにも貴重な存在となったのです。言うなれば、天皇陛下は、この世に於ける天の代表者として日本人は認識してきたのであり、天の力と、慈悲の心を持つ大いなる存在なのです。

イギリス王室について、
フランスの教育者ブートミー氏は著書の中で
「それは権威の現れのみならず、

国民の創始者にして象徴である。」

と言っています。

これが本当であるのであれば、

日本人はその考え方に親しみを覚えるものであり、
同時にこの概念は、日本のご皇室に於いては
何倍にも強調すべき概念であると言えます。

神道教義に於ける、2大特徴と言えるものは、

「愛国心」と「忠誠心」になります。

アーサーメイクナップ氏は著書の中で、
「ヘブライ文学で語られる内容について、

神を語っているのか、あるいは自国なのか、国民か、

エルサレムなのかを見分けるのは困難だ」

と指摘しましたが、

このような混乱は、日本に於いてもあると言えます。

神道は、理念体系としては曖昧な面がありますから、
当然の事と言えます。

神道は、体系化されたり、

教義を持つようなものではありません。教義というよりも、情念という様な形で国民一人一人に作用するものでした。キリスト教と違い、神道は、信仰上の条件や取り決めは無く、生活について一つの基準を与えたに過ぎないものでありました。

◆ 孔子の教えから広がった武士道の道德観念
五倫と呼ばれる、君臣、親子、夫婦、長幼、朋友の孔子の教えが武士道に於ける道德的教義の礎となりました。

これらの内容は、儒教が日本に流入する前から、日本人の本能としてあったものですから、教訓としては、再認識したに過ぎないものではありませんが、世間のあらゆる習わしに通じた孔子による、政治道德に焦点を当てた貴族的・保守的な教えは、武士階級が求めるところに見事に適応したのです。

続いて、孟子の教えも、

武士道に対して、さらに大きな権威をもたらしめました。

孟子の、気概や思いやりのある性質は、

日本国民に親しまれるものでした。

しかし、その思想は、

日本の封建秩序を破壊しかねないものとも取られ、

長い間、焚書にされていたこともありました。

にもかかわらず、

孟子の教えは、

侍の心の中で不変の地位を確立していました。

孔子と孟子の教えは、若者たちの人生教科書、

大人たちの議論に於ける最高権威となったのです。

しかしながら、

「論語読みの論語知らず」という諺があるように、

この2人の思想を知っているだけでは、

尊敬を受けるところか、冷笑され、蔑まれたものでした。

西郷隆盛は「書物の虫」と言い、

三浦梅園は

「野菜は青臭さを消すために茹でなければいけない。

読書の少ない者は、少し学者臭く、

読書の多い者は、更に学者臭い。

「どちらにも困りものである。」
と言いました。

梅園の言わんとする所は、
知識は心にまで根付かせ、
品性として見える様になって初めて、
真の知識になるという事です。

ですから、単なる学者は、
教訓をただ反復して出力するだけの
機械程度にしか見られなかったのです。

重んずるべきはあくまでも「行動」でありました。
知識とは、それ自体が目的ではなく、
あくまでも目的を達成する為の
手段としての位置づけだったのです。

◆ 武士道精神は、知行合一に集約される。

武士道精神は、
日常の一挙手一投足に具体的に
反映されなければならぬものとされてきました。
ソクラテスが明かしたようなこの考え方が醸成され、
儒学者の王陽明によって

「知行合一」という格言が生み出されるに至ったのです。

ここで、少し、

王陽明についてお話出来ればと思います。

なぜなら、高潔な侍たちの一部が、

王陽明の教えの影響を強く受けている為です。

また、クリスチャンにとっては、

王陽明の教えには、

新約聖書の教えに通じるものが数多くあるという事も、注目すべき点でしょう。

マタイによる福音書6章33節

「まず神の国と神の義とを求めなさい。

そうすれば、これらのものは、

すべて添えて与えられるであろう。」

という様な内容は特に、

王陽明の教えの端々に表れているのです。

陽明学派の儒学者、三輪執斎は、

「天地と、全生物の神は、人心に宿り、

人の心そのものとなる。

それ故に、心は生き物と言え、

常に光り輝くものである。」

「人間の本質・心の、精神の光は純粹で、他の意志に左右されるものではない。われわれの心にひとりでに沸き起こり、正しいものと間違っているものを示し、それが良心と呼ばれるものだ。」

これは天の神から出る光である。」
と言いました。

これらの内容は、英国の医学者アイザックペニンントン氏などの、哲学神秘主義者などが残した言葉と似たような面があります。

王陽明は、人間の良心を、極端な超絶主義にまで昇華させ、善悪判断のみならず、あらゆる精神的現象や物理現象の認識能力も、その良心が根源となっていたとしました。

彼は、英国の哲学者バークリーや、ドイツの哲学者フイヒテに負けるとも劣らず、観念論に於いてはその様な領域に達していましたが、それ故に、人間の知力以外の存在を

否定してしまっていた一面もありました。

王陽明の説いた儒学には、

その様な唯我論的間違いがあったとしても、
我が国日本に於いて、

歴史上最も不安定状態にあった戦乱の時代に、
安全を保障するための、

自己確立に於ける道義的価値を持っていたのです。

この様に、

侍たちが抱いていた道徳観念は、

絶対的な一つの真理に集約されるものではなく、
枝葉の教訓が寄せ集められて

出来たものでありましたが、

これら道徳観念の集大成こそが、

「武士道の芽生え」であったのです。

フランスの学者ドラマズリエール氏は日本について、

この様な感想を述べています。

「16世紀半ばでは、

宗教や政治、社会、

すべてに於いて混乱しているのが日本でした。

その様な中で、数々の内乱を乗り越えるべく、

それぞれが自力で正義を貫き通す為に、
精力的なリーダーシップ、
素早い決断、貫き通す実行力、忍耐する力が
日本人の中に芽生えたのです。
日本でもヨーロッパと同じように、
中世的な野蛮さから、
好戦的ながら不屈の精神を抱く存在に
生まれ変わったのです。
これが、日本人の資質の根源となり、
その精神性が16世紀の日本に於いて
発揮された理由でした。
文化の発達したインドや中国に於いても、
人間の差は、
それぞれの精神力や知識量の程度に
左右されるとされていていましたが、
日本では、それに加えて、
性格の独自性によって異なるという概念が
あったのです。
個性とは、進んだ文明や民族の現れとも言えます。
ニーチェの言葉を借りれば、
アジアの人間性を表現すれば、平原と言え、

日本とヨーロッパの人間性を表現すれば、
山岳と言えるでしょう。」

この様に論評された日本人の民族性ですが、
これについて、

次は我々日本人の視点からお話したいと思います。
まずは、「義」という内容です。

第3章 「義」人としての正しさ

◆ 人の道、義の精神

「義」は、武士道の中でも最も厳格なものであり、侍たちにとって、

卑劣や不正ほど嫌われるものはありませんでした。

この観念は、範囲があまりに狭く、ある面間違いかもしれません。

林子平は、この義について、

死ぬべき時は死に、

討つべき時は打つ「決断する力」であるとし、

また、真木和泉守は、

「武士が最も大切に考える方は、節義である。

節義は背骨に当たり、

これが無ければ体は成り立たない。

その為、人は、あらゆる才能があつたとしても、

この節義が無ければ、武士ではない。

節義に比べれば、

社交辞令など取るに足らないものだ。」

と語っています。

これらの教えは、
自らを「義の道」とし、
「われに従えば、

失われたものを見いだすことができるだろう。」
と語ったイエスの教えに導いてくれるものです。
要するに、

この「義」という考え方は、
失われた神の楽園を取り戻すために通るべき、
細く長い道である、という事です。

策略が戦略として、
嘘が戦術として正当化される戦乱の中に於いても、
正しさ、正直さ、素直さを追求する

この様な「武徳」の精神は、
常に日本人の心の中で賛美されるものでした。

時を経て、封建制末期、戦いの場面が少なくなると、
侍の生活にも一定の余裕が生まれてきて、
芸事などの遊びが流行るようになってしまいました。

その様な退廃に向かう世に於いても、
「義士」という概念は、

人々の心の中で、最高の地位を占め続けていたのです。

あの有名な「忠臣蔵」の話に登場する、「四十七人の義士」を見てもわかる事と思います。

◆ 義理という概念の由来

「義」は、次項で述べる「勇」と

まるで双子の兄弟の様な関係性にあります。

どちらも「武徳」に集約される内容です。

勇の前に、義の派生語と呼ばれる

「義理」についてお話ししたいと思います。

字義的には「正義の道理」です。

これは、

親や上司、部下、社会に対する

《正義の道理》に基づいて生まれる感情ですが、

いつしかその内実は「義務」へと変貌し、

そして最終的には「世論が求める義務」を

意味するものへとなっていました。

私たちの行動力の源泉は「愛」ですが、

その愛が生じない場合、行動を強いる為の権威として

「義理」が用いられたのです。

これは、個人的感情が結びつかない場合に於いても、

人としての理性、正義の道理に基づくが故に、たとえ心の負担になってもそれを乗り越え、正しい道に人を導く事を可能にした、という点では非常に良い働きをしたと言えます。

しかしながら、

義理とは本来、二次的なものであり、行動の動機づけの要素としては、

唯一の律法である、

イエスが説いた「愛の教え」には劣るものです。

愛は神から始まるものですが、

義理とは、人間関係による産物だからです。

本来は、愛情の発露であるべき行動の動機が、義理という形態をとった事で

強制力を持った事によって、

人間社会が作った秩序に、

正義が屈服させられる場面が

局所的に発生してしまいました。

極端な例を挙げると、

「母が長男を救うために、他の兄弟を犠牲にする事」

「父が遊ぶ金を稼ぐために、娘が体を売る事」

などの状況です。

義理は本来

《正義の道理》として始まったにも関わらず、人間社会に於ける我欲主義者の詭弁に弄ばれ、墮落し、その翼の中にはありとあらゆる偽善を隠し持つ言葉へ変貌し、恐るべき程多くの誤用を生んでしまっている現実が散見されます。

もし武士道に、

正しい勇氣、それを貫く精神力を意味する

「勇」の要素が無ければ、

この「義理」は、

登場して即座に、徳としての機能を有する間もなく、卑怯者の詭弁として利用されていた事でしょう。

第4章 「勇」 逆境に動じない勇氣

◆ 勇とは正しきことを為すこと

孔子が、

「義を見てせざるは勇なきなり」と言いましたが、これは、

「勇とは正しきことを為すこと」である事を表しています。

まさしくその通りであります。

危険、命を顧みず、自ら死に行く事が時折、勇氣と見られがちですが、

シェークスピアがそれについて、「勇氣の私生児」と括ったように、

武士道に於いても「犬死」とされ、侍の価値観でも決して、

称賛されるものではありませんでした。

徳川光圀は、

「戦場に身を投げ、ただ死ぬ事は簡単であり、

低俗な者にも出来る事だ。

生きるべき時には生き、ここぞという時に死ぬ事が、

真の勇氣と言えるものである。」

プラトンも

「勇氣とは、恐れるべき事と、

そうでないものを見分ける事である。」

と言っており、

これは世界共通の認識であると言えます。

ヨーロッパで

「道徳的勇氣」と「肉体的勇氣」が区別されていた様に、

侍の子供たちも、日ごろから

「大義の勇」と「匹夫の勇」の話を

よく聞かされていたものでした。

剛胆、不屈、勇敢、大胆、勇氣という考え方は、

子供心に大変響くものであり、

軍記物語の読み聞かせや、

兄弟同士でその考え方、

行動の在り方を比べられるなどして

親からよく鍛えられたものです。

子供が怪我をして泣いたときには、母は、

「この程度で泣いては臆病者です。」

戦場で腕を失ったらどうするのですか？

切腹を命じられたら、あなたはどうするのですか？」

と励ましながらかも常に勇気づけるのが、
日常の風景でした。

『先代萩』に出る幼い主人が、
ひもじさに耐えながら使用人に

「子スズメは巢の中で口を開いて、

親スズメから餌をもらう。

しかし、侍は空腹でも、

それをひもじく思ってはならないのだ！」

と言う場面は

日本人の間では有名な話です。

ライオンが崖から子を突き落とす様に、

空腹にさせられたり、

寒気にさらされたり、

まだ幼いのに、面識のない所へお遣いに行かせたり、

冬の早朝に素足で師匠の元に通わせ、

朝食前の素読をさせたり、

晒し首をあえて見に行かせたり、

夜中にその首に自分が見に行ったことを証す

印をつけさせたりと、

兎に角、文字通り過酷な厳しさで

徹底的に鍛えていました。

このスパルタ形式とも言える教育法で、
度胸をつけさせるのは、

現代の人々にとって、
恐怖と疑問を持つものかもしれませぬ。

これでは、優しい心が培われないのではないかと。
そこで、

武士道が、この優しさについて

どのような認識を持っていたのかを、
次項で述べたいと思います。

第5章 「仁」他者への思いやり

◆なぜ、「仁」は王者の徳と言われるのか

「仁」とはつまり、

愛や、寛容、哀れみなどを表す言葉ですが、

これは常に、徳の中で最高の地位を占めるものでした。
シェークスピアは、

「慈悲は王冠よりすぐれた君主である」と述べましたが、
まさしくその概念が、

この日本に於いて深く浸透していたのです。
孔子も、

「君子はまず徳の充実に気をつけるのである。
徳があれば国民が帰服してくる。

国民が帰服してくると国土が保持できる。
国土が保持できると、財物が豊かになる。

財物が豊かになると流通も盛んになる。
徳が根本であって、財物は末端なのである。」

「統治者の仁慈は万民に及ぶものであるが、
逆に仁慈なき統治者の下では

組織の活力は減退し弱体化する。」

と言ひ、

孟子も同様に、

「不仁な者で、他者の国を奪い取って

諸侯となった者はあるだろう。

しかし、不仁な者で、天下を取って天子となった例は、

昔から今まで一度もない。」

と言いました。

二人とも、国民を統治するものとしての在り方として、絶対必要不可欠な要素として「仁」を説いています。

「仁とは人なり（吉田松陰）」

つまり、仁が無ければ、人でなしという事です。

世界史を俯瞰してみると、

封建制では、

力にものを言わせる武断政治によく陥りがちですが、

我が国日本に於いてその最悪の専制政治から

国民が救われてきた理由は、

ひとえに、

この「仁」の徳目があったからに他なりません。

被統治者が、自ら心身を無条件で統治者に捧げた時、

その社会には、

統治者の強力な意思だけが残る事となります。

その結果、専制政治が絶対性を持つようになるのです。ヨーロッパ人は、自国の歴史を棚上げして、これを、東洋的専制と断罪しましたが、日本の封建制と、ヨーロッパの専制政治は、全く別物であると言えます。フリードヒ大王が

「王は国家の召使である」

と表向きに宣言したのと同じ頃、日本に於いては、米沢藩主の上杉鷹山が、「人民は国家に属しているから人民であって、

自分勝手にしてはならないものである。」と宣言していました。

封建制は、必ずしも暴政や圧政を生むものではない事が分かります。

日本の封建制に於ける、主君たちは、必ずしも全員が、被統治者に対する義務があると

考えていた訳ではありませんでした。しかし、統治に於ける大前提として、天や、先祖に対する責任感を心に堅く抱いていたのであります。

主君は、全ての民にとっての父母として立っており、

民たちを、天からの授かりものとして捉える文化があったのです。

古代中国の『詩経』には

「殷の王が人の心を無くすまでは、

天は彼らの前に現れる事が出来ていた」とあります。

また、孔子は『大学』で

「有徳の楽しい君子は人民の父母のようなものである。

人民が好ぶものは君子もそれを好み、憎むものは君子もそれを憎む。

これを人民の父母と言う。」と教えています。

武士道では、世襲政治が根強くあります。

そうでありながら、アメリカの民主主義よりも、日本の世襲による武士道観念の方が、より父権的であると言えます。

つまりは、

アメリカの民主制によって作られた専制政治は、民が、心の伴わない服従を強いられる事がありますが、日本の世襲政治では、

誇り高い従順、隷従でありながらも

その中に高い精神性があるものと言えます。

この二つの明確な違いは、

「徳による統治」と、

「絶対的権力による統治」と言えるでしょう。

ロシアの政治家ポベドノスツェフ氏は、

「スラブ系ヨーロッパ人の、一人一人の人格は、
社会の連合から形成され、

最終的には国家に依存するものとなっている。」
と指摘しましたが、

この言葉はそのまま、

日本に当て嵌まるものになります。

日本人は、

主君の統治を、欧米人よりそれ程重圧に感じず、
むしろ、父権的な愛情により、
穏やかに感じるものでした。

ドイツの政治家ビスマルク氏は、

「絶対主義に求められる事は、

公平、正直、義務感、精力的な行動、謙虚である。」
ドイツのコブレンツ皇帝は

「神より賜る王権は、

神に対して大きな責任と義務を負うものであり、
如何なる存在をしてもこれを
免除する事は出来ない。」

と言いましたが、

これは日本の封建制の在り方と
通じるものがあると言えます。

◆侍の慈悲 「武士の情け」とは

大義に生きる正義観念は、

縦軸を重んじる男性的なものですが、
仁・慈悲は、横軸的な女性的優しさ、
説得力を持つものであると言えます。

伊達政宗が、

「義に過ぎれば固くなる。

仁に過ぎれば弱くなる」と言った様に、
縦軸無く、横々の優しさに溺れる様な事は
あってはならないと

侍の間では戒められてきたものでした。

愛ある者こそ勇者であり、

勇者とは、心優しい者である。

という観念は、決して珍しいものではなく、普遍的真理として広く普及しており、

これが、「武士の情け」という概念につながったのです。

ここから分かる事は、

本質的には、侍の慈悲の観念は、

一般人の慈悲の観念と同じ性質であるという事ですが、この概念が、命のやり取りにまで適用されているのが、侍の慈悲・武士の情けと言えるでしょう。

武士は、

与えられた軍事的特権を誇りにしていながらも、孟子が説く「仁」の思想に深く同調していました。

孟子は、

「仁が不仁に勝つ事とは、水が火に勝つ様なものである。

しかし、昨今、

仁を行う者は、

わずか盃一杯くらいの水しか使わずに、

車いっばいに積んだ薪の火を

消そうとする様なものとなっている。

それでは火が消えるわけがない。

これによって、

仁は不仁に勝てないものと決め付けてしまう。

この様な事をする者は、

不仁に味方するも甚だしい者と言っても

過言ではない。

このような人は、

いずれその少しばかりの仁も

無くしてしまっただろう。」

「他人のことを痛ましく思っただけで同情する心は、

やがては人の最高の徳である

仁に通ずるものとなる。」

と説きました。

これらは、

ヨーロッパの思想よりも急先鋒を行く

究極の人間愛を説いた思想であると言えるでしょう。

これまで東洋の倫理観念については、

多くの誤解を生んできましたが、

東洋の哲学には、

ヨーロッパ文学の最高位の格言と通じる

品性を持っている事を

ご理解頂けた事と思えます。

◆ 武勲までも捨て、慈悲に生きた侍の涙の物語

ここまでで述べてきた、侍の慈悲・武士の情けが
武士社会に於いて、

具体的にどのようなものであったのか、
一つのお話をご紹介しますと思います。



蓮生法師（菊池容斎・画）
「行住坐臥、西方に背を向けず」

この、馬に後ろ向きに乗る

一人の僧侶の絵は有名かと思いますが、

この僧侶は、かつて、

その名を呼ぶだけでも恐れられる程の武士で、

熊谷直実という方です。

1184年、日本歴史の中で有数の激戦であった、
須磨の浦の戦いで、

直実は、一人の敵と一騎討ちを挑み、
相手を組み伏せました。

この様に、相手と正々堂々と

剣を交わす事が出来なくなった場合の作法として、
自分より身分の高い場合、

あるいは力量が同程度であれば

血を流さずに終わる、というものがあつたのですが、
その兜をはぎ取ると、

相手は、まだ若い平敦盛でした。

直実は、

自分の息子と同年代の平敦盛の姿を前にして、
どうしても殺す事が出来ず、

どうか、味方に見つかる前に逃げてくれる様に
懇願しますが、

平敦盛は、互いの武士としての名誉を守るために、
自分を斬る様に頼むのでした。

とうとう、直実の味方の軍勢が迫ってくると、
やむにやまれず、

「一念阿弥陀仏、即滅無量罪」と叫びながら
平敦盛を斬ったのです。

この事があって、直実はこの戦いの凱旋後、

一切の武勲と名誉を捨て、
出家し、念仏行脚に明け暮れる余生を送ったのでした。

この熊谷直実の話について、
結局は、若き平敦盛が殺されてしまった事など、
様々な欠点を指摘する方も
いらっしやるとは思いますが、

このお話は、
たとえ悲劇的な結果は同じであっても、
仁の心が、どの様にして、血生臭い侍の社会を、
人間らしく彩ったものであるかが分かる
内容となっていると思います。

この様な点を踏まえれば、
キリスト教が伸びなかった我が国日本に於いて、
なぜあれだけ急速に
赤十字運動が定着したのかについても
説明がつくと思います。

我々日本人は、
世界がようやくジュネーブ条約などの
人間愛に目覚めるよりも遙か昔から、
敵兵を救助する文化が、

当たり前前の事として定着していました。

◆侍たちの、詩人としての一面

さて、ここで

侍たちの人間性を探るために、
侍と音楽のつながりについても
お話ししたいと思います。

高い士気と、

スパルタ的な訓練で有名な薩摩藩に於いて、
若者が音楽を愉しむのは、よく見られる光景でした。
これは、血を騒がせるようなラッパと
太鼓の激しいものではなく、
優しくもどこか儂い、琵琶の調べでした。

アルカディア憲法では、
過酷な天候によるストレスを軽減する為に、
30歳以下の全青年への音楽の稽古が
義務付けられていました。

古代ギリシャ歴史家のポリュビオス氏は、
このお陰で、

アルカディア山脈地域に
残虐な文化が定着しなかった
のではないかと分析している
ようです。

薩摩藩の文化にも、
これと繋がる意義があったと
言えます。

我が国日本に於いては、
薩摩藩のみならず、
全国的にこの様な文化が定着
していました。
それが「詩歌」です。

四十七士の大高忠雄の逸話が、
一番分かりやすいものだと思
います。

彼は俳句の稽古を進められ、
そこで「鶯の声」というお題
を与えられましたが、
それに反発し、

「鶯の初音を聞く耳は別にし
ておくもののふかな」という
句を投げ返しました。

それでも師匠は、荒々しい彼
を励まし続け、
ある日、彼は詩歌の世界に目
覚め

「もののふの鶯きいて立ちに
けり」という句を歌ったので
す。

侍と詩歌は非常に密接なものでした。戦で命を落とした侍の持ち物から、辞世の句が出る事はよくある事でした。ヨーロッパに於いては、キリスト教がある面、戦場に於ける、他者への愛情を培うものとして機能していたと言えますが、日本に於いては、音楽や、文学を愉しみ、愛する心が、その役割を担ったのです。

これらの文化が、思いやりの心を育み、相手を尊重する心、謙虚さ、丁寧さの概念が生まれ、次項でお話する「礼」に繋がるものとなりました。

◆ 愛は「礼」の真骨頂

日本人の礼儀良さは世界でも有名ですが、もし、その礼の動機が、

自分の品性を保つという

保身的な感情によるものであれば、

それは浅はかな徳と言わざるを得ません。

あくまでも、礼は、

相手を思いやる、その内面的な心の発露として

自然体で外面的に

表れるものであるべきものだからです。

もちろん、

社会生活に於ける、

相手の地位を尊重するものでもありますが、

これについても決して、

お金などの外面的な事ではなく、

どこまでも人格に於いて立派かどうか、

心の価値を基準とするものなのです。

礼の真骨頂は、「愛」です。

これは、一人ひとりの胸の内に秘められるものであり、寛容、慈悲、人を恨まない、自慢しない、高ぶらない、憤らない、自分の利益を求めない、相手を不快にさせない、などの特性を持っています。礼を最高の徳とする概念は、アメリカにもありますので、これは、世界共通の概念であると言えます。

私が、この礼に価値を置いている事は間違いありませんが、徳目の中で最高の地位を持つものでは無いと考えています。

礼を深く研究すると、更に高位の徳目と関係してくる事が見えてくるのです。礼とはそもそも、単独で存在するものではありません。

にも拘らず、礼だけがクローズアップされ、今日、多くの偽物が出現している様にも見えます。その違いを喩えるなら、音楽と音が同じではない、という様な所です。

心が籠っていない、形だけの礼は、もはや、礼と呼べるものではありません。

礼儀作法が、社会生活に於いて必須のものとして扱われる様になれば、自ずと、

形としての礼儀作法が独り歩きする様になる事は簡単に予想の付く事です。

歩き方、座り方、挨拶の仕方、食事のマナー、お茶をたてる事まで礼式に昇華されました。

アメリカの社会学者ヴェブレン氏は著書で「礼儀作法とは、貴族生活の産物である」と指摘していますが、まさしくこの通りです。

ヨーロッパ人が、日本のあまりに細かい礼儀作法について、人々の思考力を奪う愚かな文化と

断罪している所をよく見受けますが、私に言わせれば、

ヨーロッパ人たちの、絶えず変化する流行への、異常なまでの拘りようほど馬鹿げたものでは無いとも思います。

ただ、その流行について、単なる見栄や気まぐれと括っている訳ではありません。人間の、美を追求する探究心と見ているのもあります。同時に、日本文化に於ける細かい礼儀作法も、大切なものであると考えます。それは、先人の試行錯誤が積み重なって培われた、最も無駄無く、最短で目的を達成し得る、確立されたプロセスであるからです。そして、この礼儀作法を守る事によって、道徳的訓練もなせるといふ面もあります。正しい作法を繰り返し練習し、体で覚える事によって、それがひいては、身体的健康をももたらし、それによって精神の安定までも得ることが出来るのです。そして何より、無駄の省かれた一連の礼儀作法は、最終的に優美さをまとい、美しくある事が出来るのです。この様なプロセスを通して、人格の向上を図る伝統文化があるわけですが、果たして人間は、

その真骨頂まで到達する事が出来るのでしょうか？
いや、出来ないはずがありません。

全ての道は、ローマ、イエスの教えに通じるのです！

◆ 茶道からなる侍たちの心の修養

日常にありふれた行為が、芸術にまでなり、
更には精神修養にまで昇華されたものとして、
細かい礼儀作法の代名詞とも言える「茶道」があります。
壁画を描いた原始人と同じような芸術の芽生えが、
我が国日本に於ける、
お茶を飲む行為で起こったのです。

喫茶は、ヒンドゥー教に於いて、
瞑想と共に始まった風習である事からも、
お茶を飲む行為には、
宗教や道徳に於ける重要な要素となり得る
品性を備えていると言えるでしょう。

茶道で重要視される、平安な心や、
静かな立ち居振る舞いは、
人間があらゆる局面に於いて、
正しい判断を成す為に必要な第一要件です。

茶室を見ても分かるように、そのデザインは、すっきりとしており、掛け軸も、色彩は最低限にされており、構図で美しさを表現しています。虚飾が排除される事は、宗教の本質とも通じるものであると言えます。この様な環境で侍たちは、残忍な争いや政治抗争の現実を忘れ、仲間と共に平和と友情を培っていたのです。茶道は侍たちにとって、心の修養を行うことが出来る、かけがえのないものであったのです。もちろん、茶道家の中には、いま述べた事以外の所を重要視する方もいらっしゃるでしょうが、しかしそれも、茶道の本質が、精神的な所とは無関係という話にはならないかと思えます。

◆ 相手と共に涙し、共に喜ぶ感情

礼儀は、

美しい立ち居振る舞いを習得できただけでも、大きな意味があると言えるでしょうが、それに留まるものではありません。

礼儀は、相手に対する仁の心や、謙讓心が動機となって表れるものですから、自然とその礼儀を通して、優しく美しい思いや行動が生まれるのです。

つまりは、相手と共に涙し、共に喜ぶ感情の事です。

これは、日本人にとっては、あまりにも当たり前の道徳観念となっているのですが、この心情によって展開される人間模様は、時折、外国人からは、奇妙に思われます。

これは、在日20年の女性宣教師が、奇妙な出来事と感じた事として、私に教えてくれた出来事ですが、ある婦人が、日傘をさして炎天下を歩いている時、知り合いの男性が通りかかったのですが、その婦人は、日傘を下ろして、

男性と暑さを共にしながら
挨拶を交わしているというのです。

日本人にとっては当たり前ですが、
外国人にとってこれは非常に奇妙に感じる事であり、
日本を評論した多くの外国人著者は、
これについて、日本に広く根付く
あべこべの奇妙な風潮だと
簡単に片づけてしまっていました。

別の視点で考えてみましょう。

日本で人に物を送るときは、
あなたの価値を考えると、
それに相応しい物は無いので、
せめて想いだけでも受け取って欲しいという感情で
「つまらないものですが……」と、物を悪く言います。

一方アメリカ人は、
素晴らしくない贈り物を貴方にあげては失礼になる、
という感情で、
物を贈るとき、その物を褒めたたえるのです。

この視点でとらえれば、
日本人の感情も、外国人の感情も、
突き詰めれば、相手を尊重するという点で、

同じ所にあると言えます。

つまり、お互いに持つ前提の違いから、

枝葉の事柄で揚げ足を取り、

その本質までもを頭ごなしに否定する事は、

あってはならないという事です。

第7章 「誠」 誠実に生きる

◆ 武士の約束事に契約書は要らない

伊達政宗が、

「礼も、度が過ぎるとへつらいになる」と言ったように、

誠実さの無い、芝居じみた礼は、

最早、礼と言えるものではありません。

その誠実さについて、菅原道真がしたためた「心さへやましくないならば、

ことさら神に祈らなくても、

おのずから神の加護があるであろう。」

という言葉は、ヨーロッパの如何なる文学をも凌ぐものであると言えるでしょう。

孔子に至っては、

「一切は誠から始まり、誠に終わる。

誠は全ての根元であり、

誠がないとすれば、

そこにはもうなにものもありえない。」

と言って、

誠を、
アルファとオメガとも表現された

「神」と同一視したのです。

嘘をつく人、誤魔化す人は、卑怯者と見做され、
侍はこれについて、

商人や農民よりも純度高く問われていました。

「武士の言葉」はそのまま、

「真実」を意味するものであったのです。

その重みある言葉、信頼により、

侍同士の約束事は、

通常では契約書なしに交わされたのでした。

契約書を書かされる事は、

侍にとって侮辱的行為ですらあったのです。

侍の逸話の中には、

二言、嘘を発した事で、

死を以て償った話がいくつもありません。

この様に、約束とは

侍にとってはあまりにも重みのある事柄ですから、
おやみやたらに宣誓するのは、

良くないものと認識されていました。

今日、多くのクリスチャンが、
マタイによる福音書5章33節〜37節

「また昔の人々に

『いつわり誓うな、誓ったことは、
すべて主に対して果せ』

と言われていたことは、

あなたがたの聞いているところである。

しかし、わたしはあなたがたに言う。

いっさい誓ってはならない。

天をさして誓うな。そこは神の御座であるから。

また地をさして誓うな。そこは神の足台であるから。

またエルサレムをさして誓うな。

それは『大王の都』であるから。

また、自分の頭をさして誓うな。

あなたは髪の毛一すじさえ、

白くも黒くもすることができない。

あなたがたの言葉は、

ただ、しかり、しかり、否、否、であるべきだ。

それ以上に出ることは、悪から来るのである。」

と指示されているにも関わらず、

絶えず破って、

自己顕示欲に浸っている有様とは、真逆であると言えるでしょう。

侍の誓いは、お戯れな形式主義でもなく、見栄っ張りの不敬虔な祈りでもなく、時には、その覚悟の表わしとして、血判を押す程だったのです。

一方で、あるアメリカ人が

「日本人は、

嘘をつく事と、失礼を行う事とを

選ばなければならぬ状況となれば、迷うことなく嘘をつくだろう」

と言いましたが、

これは一面的には正しいのですが、間違っているとも言えます。

それは、

ここで言われる「嘘」のニュアンスについてです。日本で意味する嘘とは、

「真実以外の全て」というものであり、

アメリカの詩人ローウェル氏が

「ワーズワースは、事実と真実の区別が付かなかった」と言ったのですが、

まさしく、この区別が付いていないという事です。

※事実：実際に起こった事柄

真実：事実に対する偽りのない解釈

例えば、日本人は、

「私が嫌いですか？」

「貴方は調子が悪いのですか？」

と問われれば、

躊躇うこと無く嘘をつくのです。

しかしながら、

失礼にならない様にする為では無い嘘というのは、虚礼や、欺瞞的な甘言と見做されています。

◆ 武士は何故、お金の計算を嫌うのか。

侍の誠を語るに当たって、

商業に於ける道德観念に触れるのも、

的外れでないでしょう。

日本人の商業道德は、

開国以来、他国との貿易に当たって、残念ながら、わが国の評判を落とすものでありました。しかし、

この点を根拠に日本人全体の道徳観念を否定する前に、一度共に、冷静に考える事が出来れば、お互いに将来の安心を得られる事になるのかも
しれません。

各種職業の内、
商業程、侍の精神とかけ離れたものは無く、
士農工商の順番で見ても明白な様に、
分類上、高利貸しと同様に、
最下位として位置づけられていたのです。

武士は、素人農業に携わる事はあっても、
この、お金に関する業務は嫌っていたのです。
貴族を商業などから切り離すのは、

権力者への富の集中を防ぐ得策であることは、
明白であり、
ローマ帝国の崩壊の要因は、
この策を取れなかった為であると

『西ローマ帝国最後の時代』を著した

デイル教授は言っています。

この様な背景があり、
封建制に於ける日本では、
商業道徳が発達しきれなかったのです。

そして、
お金を扱う商業や高利貸しが、
社会から侮蔑される地位に置かれ続けると、
必然的にその職業に携わる者たちの品格が
低くなっていくのみならず、
その様な人々がこれらの職業に就くようになるのは、
ある面当然と言えます。

勿論、封建制に生きた商人たちにも、
互いで取り決めた最低限の道徳観念はあり、
それに基づいて取引を行っていました。
組合や銀行、保険、為替、手形などの制度が
整備されていた事からも
それは明白です。

ですが、
先述した様な、
社会から与えられた身分に甘んじていた事は否めず、

これが、日本開国後に、
外国人が来る港に、
無節操な商人が一儲けを企んで集まった
原因となったのです。

この様な社会情勢もあって、
まともな商人が港に支店を開く為に幕府に申請しても、
その人を守る為に許可されなかった事すらありました。

武士道の道徳観念では、
商業道徳の退廃を防ぐ事は出来なかったのか、
その点についてお話したいと思います。

◆時代の流れに翻弄された侍たち

日本は開国後まもなく、封建制が終わり、
特権を失った侍たちには、代わりに公債が与えられ、
商業の道へ進む方向性となりました。

しかしながら、
誠を極限まで尊ぶ侍たちには、
狡猾な商売で金儲けする仕事など、
とても務まらなかったのです。

侍たちの、ビジネス失敗談の数々は、泣くに泣けないものがあります。

武士道の道德観念そのままでは、金儲けの世界では生きていけない事に侍たちが気づくのが

時間がかかりすぎてしまい、気づいた頃にはほとんどの侍が無一文だったのです。

封建制の日本に於ける産業、政治、哲学の中で、道德観念が成長出来たのは、哲学の分野に於いてのみでありました。

開国後、封建制の元で停滞していた商業も、近代産業の発達により、ようやく、商業に於いても道德律が成長する様になったのです。

類は友を呼ぶのであれば、正直者には正直者が集う、これこそが真の財産であると言えます。

侍たちは、損得勘定では無い、純粹な「誠の心」で正直さを貫いていましたが、

商人は、その正直さを、

近代産業の環境によって盛んになった商取引で、
巡り巡って自分が損しない為に、
道徳律を持つようになったのです。

誠の精神によって生み出される、

正直さについてですが、

例えば約束手形などの末尾に、

「この借金を返せなかったら、

人前で嘲笑されても構いません」や、

「約束を守れなかったら、

バカ呼ばわりされても何も文句ありません」

という様な言葉が付け加えられる文化があった事から、
誠・正直である事と、

名誉を守る事は、同質のものであった事が分かります。
ラテン語とドイツ語の

「正直」の語源が「名誉」である事からも、

世界共通の概念であると言えます。

次に、

この「名誉」が、

武士道に於いて

第8章 「名誉」捨て身精神の礎

◆ 恥じる心こそ、純粹な徳の礎

名誉は、

侍の代名詞と言っても過言ではないものであり、それは幼い頃から厳しく教えられていたものでした。

実は、

名誉というキーワードは、

日本であまり頻繁に使われていたものではなく、

主に、「名」「面目」「外聞」などと表現されていました。

これらの語句は、

聖書に於ける「神の御名」に通じる

ニュアンスがあります。

名誉が無ければ、それは獣に等しいという観念であり、常に人として高潔に在らなければならず、

その名誉が汚される事を、

最も恥と捉える感受性が育まれていたのです。

子供のしつけに於いても、

親が取る最終手段としての説得方法は、

「人に笑われてしまうぞ」

「名を汚してはいけない」

「恥ずかしく思わないのか」

という、名誉心に訴えるものでした。

そしてこの名誉心はそのまま、

家族意識にも直結していたものだったのです。

フランス革命後の、

無道徳な自由社会を生きた小説家、バルザック氏も

「家族のつながりが浅くなった事によって、

人々は、名誉心という根本的な力を忘れてしまった」と言いました。

アダムとエバが、

聖書で象徴的に記される、

禁断の果実を口にした事によって受けた罰は、

本質的には、産みの苦しみでも、茨の大地でもなく、

彼らが腰を隠した事、

愛情、性関係の破壊による

「羞恥心の目覚め」であった事を見ると、

この、名誉心は

人類の道徳観念の中で

最も早く芽生えたものでないかと私は考えています。

カーライルが、

「恥る心は、全ての徳、善行、道徳心の畑である」
孟子が、

「羞悪の心は義の端なり」

と言ったことは、

まさしくこの事に通じる内容であると言えます。

人類始祖が神に反逆してしまい、

震える手を抑えながら、

イチジクの葉を腰に巻くその情景は、

執拗に私の胸に迫ってくるのです。

人類は未だに、

この墮落から始まった、

神に対する羞恥心を覆い隠す事は出来ていません。

侍たちにとって、

名誉心とは、まるでダモクレスの剣の様なものであり、
その執着は病的と言える程のものでした。

それによって、

短気な侍が、侮辱を受けたと思ひ込み、

些細な事が原因で刀が抜かれる悲劇が

多発していたのです。

ある町人が、侍に対して、
ノミが服に付いていると親切心で教えたところ、
侍は、ノミは畜生に付くもので、
高貴な侍を畜生扱いするのは無礼だとして、
その町人を斬った、という話があります。
しかし、

この話は余りにずさんで、
同じ時代の空気に少なからず触れた私にとっては、
にわかには信じがたいものです。

この様な話が広まった理由としては、
平民を脅かす為、
侍の特権の乱用が実際以上に誇張され噂になった、
侍の強い羞恥心についての一つの小説的表現
などが考えられると思っています。

この様な馬鹿げた一例をクローズアップして、
武士道全体を否定するのは、
カトリックの異端審問や、数々の虐殺を取り上げて、
聖書や、イエスご本人の教えを
否定するのと同じ事です。

ともあれ、
宗教的偏見にも、

多少なりとも心の琴線に触れるものがあるように、侍の異常なまでの名誉心に対する固執にも、純粹な徳を構築する要石の様な性質を、私は感じるのです。

◆寛容と忍耐

前述した、

侍の名誉心への病的までな固執の暴走を
食い止めたのは、

「寛容」と「忍耐」の精神でした。

些細な事で感情を露わにする者は、
短気な奴と、世間から笑われるものでした。

徳川家康の遺訓には、こういうものがあります。

「人の一生というものは、

重い荷を背負って遠い道を行くようなものだ。

急いではいけない。

不自由が当たり前と考えれば、不満は生じない。
心に欲が起きたときには、

苦しかった時を思い出すことだ。

がまんすることが

無事に長く安らかでいられる基礎で、

「怒り」は敵と思いなさい。

勝つことばかり知って、

負けを知らないことは危険である。

自分の行動について反省し、

人の責任を攻めてはいけない。

足りないほうが、

やり過ぎてしまっているよりは優れている。」

また、松浦静山は、

寛容と忍耐力の観点で

織田信長を「鳴かぬなら殺してしまえホトトギス」

豊臣秀吉を「鳴かぬなら鳴かせてみようホトトギス」

徳川家康を「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス」

と表現しました。

孟子も、

「あなたが裸になって私を侮辱しても、

それが私にとって何だというのか。

あなたの乱暴で私の魂を汚すことはできない」

「些細なことで怒るようでは君子に値しない。

大義のために憤ってこそ正当な怒りである」と説いています。

これらの概念が基礎となって、

侍たちは、

決して血気にはやって

戦いに明け暮れていた訳では無く、

非常に柔和な、平和な境地に到達していた事が、

小河立所の

「人からありもしないことを言われようとも、

反論などをせず、

自分にまだ信用がないことを反省せよ」

熊沢蕃山の

「人が恨んでも自分は恨まない。

人が怒ろうとも、自分は怒らない。

怒りと欲を捨てる事で、

常に心は平穏で、楽しめるものだ」

西郷隆盛の

「人間の道は、天地自然のものである。

人間は天地自然の賜物であり、

また、天地自然を本として生存しているので、
天地自然を敬う事こそが人間本来の目的である。

しかも天地自然は

他人も自分も同様に愛されている為、

自分を愛する心をもって、

他人を愛さなければならぬ。

これが天地自然の道であり、同時に人間の道である」

「人を相手にしないで

常に天を相手にするようにな心がけよ。

天を相手にして自分の誠を尽くし、

決して人を咎めるようなことをせず、

自分の真心の足りないことを反省せよ。」

という数々の言葉から

うかがい知ることが出来ます。

これらの言葉は、

イエスが明かした聖書の教えに通じるものがあります。

机上の空論ではなく、

実践に落とし込まれた、本質的なあらゆる道徳観念は、

巡り巡って、その根源である

啓示宗教の教えに近づいていくのです。

◆捨て身の精神の礎

しかし、

ここまで述べてきた

名誉に至るまでのプロセスである、

寛容、忍耐の精神を理念体系として昇華した者は

ほんの一部で、現実には少なく、

名誉の本質が何かについてまで、

普通の侍の間ではあまり追及されていなかったのが
現実です。

孟子などの言葉を学んでも、

机の上の勉強止まりで、

実践にまで応用されていなかったのが、

特に若い武士たちの特徴でした。

これによって、

ただの見栄や評判に過ぎないものが、

そのまま名誉と同一視される事もありました。

若者が求めるものは、知識や富ではなく、

結果物である名誉を得る事だけとなりました。

故郷に錦を飾れるまで、

子供は家に帰る事を、
母も子供を家に迎える事を拒んだこともありました。
この様な経緯ではありますが、
侍たちは結果として、
若い頃に獲得した名誉は、
年を取るごとにその価値が大きくなる事を
悟っていたのです。

大坂夏の陣に際して、
徳川家康の息子、頼宣は、
最前線への出陣を志願しますが、
許されず、後陣に配属されてしまいました。
戦いは勝利に終わったのですが、
その途端に頼宣は泣き出しました。

見かねた松平右衛門大夫正綱が、
「あなたはまだ若いから、
今後もしろんな戦がある。泣くことはない」
と励ますも、

頼宣は、
「右衛門！14歳の頼宣は二度と無いのだ！」
と叫んだというのです。

この様に、侍の間では、
名誉を得られるならば、

命は安いものだと思われていました。

命よりも大切なものを守る為ならば、

死をも厭わない精神、捨て身の精神の礎が、

この様にして培われたのです。

さて、

その、命よりも大切なものとは何なのでしょうか？

それこそが「忠義」であり、

これが封建制に於ける武士道の道徳律の

要石となったものなのです。

◆ 日本人独特の「忠義」

これまでご紹介した数々の徳目は、様々な階級や職業の人々にも通じる内容ですが、忠義は、侍たち独特のものであるとも言えるものです。

また、海外にも、忠誠心にまつわる物語は数多くありますが、この忠誠心を、徳目の内で最高位にしているのは、武士道の特徴であると言えるでしょう。

アメリカの教育者、グリフィスは、「アメリカでは孔子の教えにより、

親孝行が第一に置かれたが、

日本に於いては、忠義がその位置に置かれた。」と言いましたが、まさしくその通りです。

日本人独特の、主君に対する「忠義」の観念は、万民平等を唱えるアメリカをはじめとする海外の人々にとって

異様に感じられる事があるかもしれませぬ。

しかしこれは、日本の忠義観念が間違っているからではなく、世界各国に於いては、忠義は最早忘れ去られているからか、あるいは、日本の忠義観念がどの国も到達する事の出来なかった次元にまで発展しているからなのです。

かなり衝撃的な内容ではありますが、日本人の忠義の在り方を示す一つの実話をご紹介します。

◆ 自分の子供の犠牲さえ厭わない忠義の精神

菅原伝授手習鑑のお話です。

菅原道真は、政敵に目を付けられ、京を追われるのみならず、一族をも根絶やしにされるまで追い込まれていました。敵の家来は、道真の子供を搜索し、遂に、かくまわれていた武部源蔵の寺子屋にたどり着くのです。

政敵は、かくまっていた源蔵に、その道真の子の首を、期日にまで納めるよう命令したのです。

源蔵が、なんとか身代わりとなり得る子供を探していると、丁度、その寺子屋に、

道真の子と瓜二つの子供が入門してきたのです。

源蔵は、ひそかにその新入生を、身代わりにする事を決心しますが、

実は、その新入生と母親は、

その事を分かって、

敢えて身代わりになるために入門したのであります。母親の父親は、菅原道真の御恩を受けていました。

夫の都合で、その後、

別の主に仕える身となっていたのですが、道真公を裏切る事は出来なかったのです。

そして、更に残酷な事に、

その新入生の父親は、

道真公の家族と面識があった事から、

道真の子供の首実検の役割を任されてしまったのです。

いよいよ引き渡しの当日、

源蔵は、もしすり替えがばれてしまったら、相手に斬りかかるか自害するつもりで、刀の柄に手をかけていました。誰もが命がけでした。

余りにも辛い役目を終えた父親は、家に帰り、待っていた妻に、

「わが子は立派に、主君のお役に立ったぞ！」と叫んだのです。

他人の子を救うために、罪のないわが子を犠牲にするとは、なんと残酷かと読者の皆様の叫びが聞こえるようです。

しかし、この家庭は皆、自らの意志で忠義を最優先し、犠牲の道を歩んだのです。

これは、鳩を割き忘れた失敗で失った、神との信頼関係を回復する為に神から指示されて行われた

アブラハムによる、息子イサクを燔祭に捧げた事に匹敵する中身を持つものです。

(※イサク燔祭では、

「あなたのひとり子をささえ、

わたしのために惜しまないので、

あなたが神を恐れる者であることを

わたしは今知った」

の言葉と共に、殺す直前に神に止められた。)

違いと言えば、

忠義の対象が、

目に見えない、霊界の神に対してであったか、

目に見える、地上の主君に対してであったか

だけですが、

これ以上の私の説教は差し控えたいと思います。

◆ 公的な事を最優先する武士道

欧米に於ける個人主義観念は、

家族の中でも、

父、母、子、

それぞれ別々の権利や利害を認めるものであり、

それが故に、家族内でも互いに対して

背負う責任が小さいものとなっています。

しかし、

武士道を基軸として来た我が国日本では、
家族とは運命共同体であり、一心同体なのです。

武士道は、
人と人とを、

利害などの外面的な要素で引き付けるのではなく
愛を根拠として、

確固たる団結を可能とされていたのです。

愛する者の為に死ぬ事に、なんら障害はありません。
イエスは、

「あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、
なんの報いがあるろうか。

そのようなことは取税人でもするではないか。」
と語っています。

平重盛が、後白河法皇と、父の清盛の軋轢に遭遇し、
「主君に忠義を尽くそうとすれば

親に逆らうこととなり孝行できず、

親に孝行しようとするれば

主君に背くことになり不忠となる。」

と胸の内を吐露しました。

心ある神が自らを天へいざない、
純潔と正義が蹂躪される墮落世界から
解き放ってくれんとばかりに祈る重盛の姿が、
思い浮かびます。

多くの人々が、

この重盛と同じ悩みを抱えたものでした。

しかし、日本人は、この様な板挟みの局面に際して、
堅く忠義を選んだのです。

家庭教育も、その方向に傾倒していました。

個人とは、国家の構成要員としてあり、
国あっての個人という考え方があったのです。

ソクラテスは、

先祖代々、国家の下に生まれ、養われ、
教育されて来たにも関わらず、

自分は国家に属さないというのか。

という思想を展開しましたが、

これは日本人にとって全く同感な思想なのです。

政治的な服従、つまり忠義は、

過渡的なものである事は間違いないかもしれませんが、
たとえそれが一日限りのものであっても、

「ヤギザレ石の巖となりて」

の一節を信じる私たち日本人にとって
その一日はとても長い、貴重な期間であるのです。

日本人は、忠誠の先を別の主君に移すに際しても、
どちらの主君に対しても、

誠実さを欠かさないように気を遣っていました。

決して形式上の忠義ではなく、

相手を心の特等席に迎える、

心からの忠誠であったからこそその文化です。

一時、

一方に親しみ、もう一方を憎まない、

二人の主人に仕える事は出来るのか否かについて

大きな議論が起りましたが、

マルコによる福音書12章17節

「するとイエスは言われた、

『カイザルのものはカイザルに、

神のものは神に返しなさい』。

彼らはイエスに驚嘆した。」

という教えの実践を

日本人は自然体で出来ていたのです。

ソクラテスは、

生活に於いては自分自身の良心に従い、死に当たっては、国家の意志に殉じたのでした。国家権力が、人々の生活に於ける良心にまで介入するようになるような事態は、あってはならないのです。

◆ 良心の奴隷化と、忠誠の違い

武士道の道徳律は、無節操なゴマスリ、卑屈な追従など、自分の良心さえも、気まぐれな主君の命令や、酔狂、娯楽の犠牲にする事については、正しい事と評価するものではありませんでした。いわゆる卑怯者として扱われたのです。

時には、自らの命を棄ててでも、主君が過ちを犯すようであればそれを正す、自らの血を以て己の主張の正しさを示し、主君の良心に対して最期の訴えを起こす事は、

侍たちの中ではよくある事でした。

侍にとって、命は手段に過ぎず、

生きる目的は常に、

正しき道、理想を追求する事にあり、

これは、

全ての侍教育の根本たる思想であったのです。

第10章 侍教育に於ける中心軸とは

◆ 最重要視された「品格」

侍教育で最重要視されたのは、品格であり、外面的な知識や演説能力などの知的な事も重きを置かれましたが、それらは不随的に扱われるものでした。

武士道が説く所では、本来、「知」の意味する所は、道理に通じた「叡智」であり、単なる知識については、価値の置かれるものではありませんでした。

武士道の柱となる要素は、

論語で三徳と呼ばれる「智」「仁」「勇」であり、つまるところ、

行動に落とし込まれてこそ意味あるものとなるのです。その為、

実践に必要な事は除いて、単なる学問に時間を費やすことはありませんでした。

宗教的な内容については、

お坊さんや神官に一任されましたが

それできさえ、
教義が人間を救うのではなく、
人間が教義を正当化している現実を
侍たちは見抜き、
自らを勇気付けるに於いてのみ、
価値が置かれていた程徹底したものでありました。
侍にとって、学問は、
暇つぶしの娯楽レベルのものに過ぎず、
哲学は、
軍事や政治の問題解決の為の判断材料としてや、
自身の品格形成、その実践の為のものとして、
サブ的に扱われていたのです。
剣道、弓道、柔道、乗馬、
槍、戦略、道徳、書道、歴史研究、文学などが
主に、侍に教育されていた項目でした。
これらの内、柔道と書道についてですが、
柔道は、筋力に頼るのではなく、
人体解剖学を応用したもので、
その目的は、相手を殺す事ではなく、
制圧する事に留まる平和的なものでありました。
また、書道は、

文書記録という域を超え、
芸術的性質を備えるものであり、
また、文字の綺麗さはその人の品性を表す
ものとされていたのがあり、
侍の間では重要視されるものでありました。

◆ 武士の信条・知恵を妨げる「富み」

軍事戦略上欠かせない学問である筈にも関わらず、
侍教育に於いては外されていたのが「数学」でした。
これは、

損得勘定の一切と決別し、
豊かさよりも、
貧しさの中に見る美学を誇る性質に起因するものです。
名を汚す利益を得るくらいであれば、
損失を選ぶというのが、侍精神でした。

政治家が金銭の欲望を断ち、
武将が死を恐れなくなったとき、
世の中に真の平和がやって来ることを、
中国の将軍が説いていた様に、
武士道では、金銭欲は腐敗の始まりと見做され、

金儲け、貯金を卑しみ、

家庭経済の話題を出す事を下品とし、

お金の価値を知らない子供は

育ちが良いと見る文化がありました。

テモテへの第一の手紙6章10節

「金銭を愛することは、すべての悪の根である。

ある人々は欲ばって金銭を求めたため、

信仰から迷い出て、

多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした。」

という格言に通じるものです。

軍事的な面でどうしても必要な計算などは、

下級武士や、僧侶に任されていました。

軍を扱うに於いて、

軍資金の運用の重要性は誰しもが知っていましたが、

それでも、

その事を「徳」という次元に

高めるという事にはならなかったのです。

しかしながら、

「儉約」という徳は重要視されました。

これは、贅沢な生活が人間を墮落させるとして、

多くの藩で、儉約令が施行される程、究極までに生活を簡素化させる事が求められたのです。古代ローマに於いては、まさにその役人の贅沢が、国家の腐敗をもたらしたと云っても過言でないのです。我が国日本に於いて、特権階級にあった侍が、長きに亘って、海外に見る極限の腐敗を免れたのは、先述した、お金を卑しむ文化によるものでした。しかし、今日、この観念が失われたことによって、あまりにも金権腐敗政治が蔓延してしまっている現状があります。

◆ お金に換えられない教師の教え

ここまでお話したように、侍の教育に於いて最も重要視されたのは、頭でっかちになる机上の勉強ではなく、判断力と、実務処理能力でした。それら実践に直結する教えを施す、卓越した「教師」は、本質的には、知的な事ではなく、品性を醸成し、

頭ではなく、魂を育てる事こそが使命でありました。産むのは親であり、人たらしめるのは教師である、という志を持つ教師たちは、自然と神聖な存在となったのでした。

「父母は天地の如く、師と君は日月の如し」と言われたように、

時には実親以上の存在であったのが教師だったので。

昨今、如何なるやり取りも

お金無しには

行われなくなりつつある流れがあります。

これ程にまで価値が高められた教師の教えなど、精神的な価値に係るものに対して、実体的なお金を支払って返す事は、失礼とされていたのです。

それは、価値がないからではなく、お金に換えられない価値があったからなのです。魂は計測出来ません。

その様なものに外面的な価値であるお金を当てはめる事は出来ないのです。

勿論、

教師に金品を贈る事はありましたが、

これはあくまでも、教えに対する代価ではなく、「捧げもの」としての意義を持つものでした。

武士道精神に根差す教師たちは、

まさしく、鍛錬に次ぐ鍛錬によって極まった精神力、如何なる逆境にも屈しない「克己心」を持つ、学問の体現者でありました。

この克己心こそ、

侍教育に於ける中心軸と言えるものだったのです。

◆ 喜怒を表に出してはならない

武士道に於いては、

「礼」の概念を軸として、

不平不満を表に出さない忍耐力と、

相手に嫌な思いをさせない為に

マイナスイな感情を表に出さない精神力を

鍛えてきました。

これが、

日本人の禁欲的な民族性を形成したと言え、

「喜怒を色に表さず」という格言に通じる人は、

評価される文化が出来たのです。

しかし、この一面は外面的なものに過ぎません。

実際の所、その内面に於いては、

他のどの民族にも負けないほどの

感受性を持っているのが日本人なのです。

なぜならば、

感情は表に出すよりも、

抑制する方が、よっぽど努力を伴うものであり、

それこそが、心を鍛える事に繋がる訓練になっているからです。

「アメリカ人の夫は人前で妻とキスをし、

家の中では打つが、

日本人の夫は、人前で妻を打ち、

家の中ではキスをする」

という言葉が有名ですが、

まさしくこの事であると言えます。

日本人の平常心は、

日清戦争への出征時の駅の様子からも分かります。

その場を見たあるアメリカ人は、

悲しみと苦しみに溢れた

地獄の様な状況になると予想していましたが、

実際は、

小さな声で泣き、列車の出発と共に

帽子を取って深くお辞儀をするだけで、

真逆であったのです。

ある家庭に於いては、

父はその威厳故に、

病床に伏す息子には目もくれないふりをしてしながら、

誰もが寝静まった夜に、

ふすまの隙間から息子の寝息を確認する様な、
また、
ある母親は、
その臨終にあっても、
息子の務めの邪魔になるからと言って、
呼び戻さないよう家族に言った、
そんな話があるのです。

◆ 微笑を浮かべる日本人の内心

日本に於ける、クリスチャンの間で
海外に見る様な熱心な宣教活動が展開されないのも、
この、克己心が一つの要因となっています。
日本人は、
たとえ、
魂が揺さぶられるような感情になっても、
その感情のままに熱狂する事は、極めて稀なのです。
これは極めて正しい事であると言えます。

霊的な、あるいは感情的な話を、
自分の感情の盛り上がりで軽々に発言することは、
モーセの十戒の第三の戒め

出エジプト記20章7節

「あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。

主は、み名をみだりに唱えるものを、

罰しないでは置かないであろう。」

を破っている事と同じなのです。

余りにも価値ある事柄を、

大衆の前で大っぴらに叫ぶ事は、

そこにどうも誠実さが感じられず、

日本人にとっては耳障りに感じるものなのです。

侍たるもの、石榴のように、

口を開いて己のはらわたを見せる様な事は慎むべき、
として

「口開けて腸見する石榴かな」という諺があります。

あるドイツ王家の人が言った

「咄く事無く、忍耐する事を学べ」

という言葉と通じるものです。

悲しみに暮れる日本人に、

その心中を案じて尋ねたとしても、

大概は、笑ってその悲しみを隠し、

いつもの様に接するものです。

外国人がこれを見たら、

狂っていると思うかもしれないませんが、

これこそが日本人の性質なのです。

日本人は、どれだけ辛い状況に追い込まれても、
敢えて笑顔を決やさず、

悲しみや怒りの感情を制御するものなのです。

この感情が爆発しないために、

安全弁として用いられたのが「詩歌」でした。

加賀の千代女は、亡くした子供に思いを馳せ、

「蜻蛉つり 今日はどこまで行ったやら」
と歌いました。

日本文学の真珠の様な輝きを、

外国語でありのまま伝える事は不可能ですから、

これ以上の引用はやめたいと思います。

ここでは、

様々な感情を内に秘めた日本人の笑い、

その日本人独特の胸の内の在り方について、

少しでもお伝え出来れば良いと思っています。

◆心の平安が、克己の理想郷

日本人の、死を恐れぬ精神や忍耐力について、海外ではよく、神経の細やかさが無いからだと言われていますが、それも無い事は無いでしょうが、ではなぜ、

日本人はいつも神経を

張り詰める性格ではないのでしょうか？

落ち着いた風土や、

社会体制にも要因はあるでしょうが、

私の感想は、

日本人は、どの民族よりも感情的であるがゆえに、自ずと、常に強力な自制心を持つ

特性を備える様になった、というものです。

長きに亘って培われてきた克己心の徳目ですから、これについて、どれだけ長い説明をしたとしても、完璧な解説は出来ないかもしれませぬ。

克己心を養うための訓練では、

時として度を過ぎやすい一面がありました。

それにより、
素直な一面を歪ませてしまう事や、
頑固者、偽善者、愛情欠乏症を
生み出す事もあったかもしれませぬ。
時を経て醸成される倫理観念は、
如何なる徳目にも、
表と裏があるものです。
それについて全否定する事なく、
徳目ごとに良い点を選び出し、
理想を追求し続けてこそ、
絶対的真理に近づく事が出来るでしょう。

次に述べるのは、
自殺（切腹）と、復讐（敵討ち）についてですが、
切腹に於いて、この克己心という徳目が
究極にまで到達した事を、
お伝えしたいと思います。

◆ 腹に魂が宿るといふ考え方

切腹について、

外国の方々は、

馬鹿げた文化だと断罪するかもしれませんが、

ブルータスが一世一代の大勝負に負け、

自害する場面や、

カトーが辞世の句を遺して

腹に剣を刺す場面などを見て、

嘲笑する者はいないと思います。

日本人にとって、切腹という死に方は、

とても崇高なものであり、

そこには、様々な徳、優しさ、偉大さが入り交じり、

新たな命の始まりさえ覚えるものであったのです。

イエスが十字架に散ったはものの、

新たな出発を以て

世界をここまで凌駕した事と通じる概念です。

切腹が非合理的な事ではない根拠は、

今述べた、海外の概念との比較論に留まるものではありません。

創世記43章30節には、

「ヨセフは弟なつかしさに心がせまり、

急いで泣く場所をたずね、へやにはいって泣いた。」

とあり、

欽定訳聖書では

《心がせまり》に《腸》の表現が取られているのですが、腹部に魂が宿る概念は、聖書文化にも通じるものなのです。

切腹には、

わが魂が宿る腹を裂き、

そこに穢れがあるか潔白であるかを、御覧に入れよう。

という意味があったのです。

私が、自殺を

宗教的にも道徳的にも認めているという事では

決してありませんが、

名誉を最重要視する侍にとって、切腹には、

このような背後的な意義があったという事を

ご理解いただければと思います。

◆ 儀式としての意義も持っていた切腹

武士道に於いて、切腹による死は、名誉に関する重大な問題についての、最終解決方法としても用いられるものでした。

ソクラテスは、

たとえ国家の命令が過ちでありながらも、国家の命令に従って、毒杯の数滴を神に捧げ、自らその命を絶ちましたが、それに対して自殺者という汚名を着せる者は居ないでしょう。

侍にとって、切腹とは、

単なる自殺の一手段としてあったものではなく、罪の清算、詫び、名誉の挽回、潔白の証明、朋友を救う為の儀式であったのです。

その為、

切腹は決して、狂気に満ちたものではなく、平静な心情と、立ち居振る舞いを極めた者でなければ、とても完遂出来るものではありませんでした。

これらの特徴から、

切腹は、侍に相応しい事として確立されたのです。

◆切腹の様子

イギリスの外交官ミットフォード氏が、

使節団として、切腹の現場に招かれた時の状況です。

「それは、寺院の本堂で、

荘厳で神秘的な空間の中で行われていたものでした。

祭壇の前に綺麗な畳があり、

その上に赤いじゅうたんが敷かれ、

その左側に、日本人の検視7人、

右側に我々使節団7人が座りました。

まもなく、麻の袴姿の滝善三郎と、介錯人と、

3人の付き添いの役人が入場しました。

介錯人とは、処刑人とはニュアンスが違い、

介添え役としての立ち位置であると言える存在で、

今回は、善三郎の弟子が、

その剣術を見込まれて任命されました。

付き添いの役人が持つ、捧げものを置く為の台には、

白い紙に包まれた30cm程の脇差が乗っていて、

それを善三郎が受け取ると、祈る様に両手で頭の上まで持ち上げてから、自分の前に置きましました。そして善三郎は、神戸に於いて、外国人へ発砲命令をした罪を負って切腹する旨の言葉と共に、上半身だけ裸となって、切腹後、後方に倒れないように両袖を膝の下に入れ、脇差を眺めた後、切腹しました。左下の腹部に突き刺した後、ゆっくり右に引き、その後、刃の向きを変えてやや上に切り上げました。この間、善三郎の表情は一切変わっていませんでした。脇差を腹から抜いた後、体を少しばかり前に傾け、介錯人によって斬首されました。介錯人は一礼し、白紙で刀に付いた血を拭いて、退場しました。すると、付き添いの役人が我々7人の使節団の前に来て、滝善三郎の切腹の儀式が完遂されたことを検分する様話してきました。

この様にして一連の事は終わり、我々は寺院を後にしました。」

切腹について、もう一つご紹介したいと思います。八磨の物語です。

河津左近24歳、内記17歳の二人が、父の仇を討つべく、徳川家康の所へ忍び込んでも、捕まってしまう。

家康はその報告を受け、

自分の命を大胆に狙った勇氣に感銘を受け、謀反を起こした一族の男子は皆殺しにされる掟があったのですが、

最も格式高い、切腹の儀を河津家に許したのです。

この運命は、左近と内記の弟、

8歳の八磨も共にすることとなりました。

切腹の際、

左近は、斬り損じのない様に見届けるからと、

八磨から切腹すると言いますが、

まだ幼い八磨は、

自分は切腹を見た事が無いので、兄たちを見て習い、それにとりかかると言ったのです。

それでこそ、河津家の子供だと大層に兄たちは喜び、2人の兄は説明をしながら切腹を行いました。両側に座る兄たちを見届けた八磨は、その手本通りに、立派に切腹をやり遂げました。

◆ 武士道精神から導き出される本来あるべき死生観

ここまで切腹についてご紹介しましたが、この切腹が名誉な事として崇められる様になると、血気にはやる者によって、その乱用が多発する様にもなってしまいました。

しかし、武士道精神では、その様な無意味な死に急ぎは、卑怯者として見做されたのです。

山中鹿之介は、敗戦の中、武器もボロボロで、山の中一人で飢えていました。

ブルータスであれば、このような状況になれば自害する事でしようが、真の侍、鹿之介は、この状況で死ぬ事は卑怯者と捉え、中世カトリックの暴虐に、不屈の精神で挑んだクリスチャンのごとく、

「憂きことのないほこの上に積もれかし

限りある身の力ためさん」

という歌を詠んで、自らを奮い立たせたのです。
この様な

忍耐と、正義の心を以て、

何事にも負けずに立ち向かう「気概」こそ、

武士道精神の本質であると言えます。

孟子に言わせれば、

「天が人に重大な任務を与えようとするときには、

必ずまずその人の精神を苦しめ、

その筋骨を疲れさせ、

その肉体を飢え苦しませ、

その行動を失敗ばかりさせて、

空回りするような大苦境に陥らせるものである。

それは、天がその人のこころを鍛え、

忍耐力を増大させ、

大任を負わせるに足る人物に

育てようとしているからである。」

という事なのです。

死を恐れない勇敢さは大切ですが、

時として、死ぬ事よりも生きる事の方が困難な場合、

真の勇敢さを持つ者であれば、生きて勝利する道を切り拓くという事です。

天海和尚が言った

「普段良い事を言う人間でも、

死んだ経験の無い侍は、肝心な時に逃げる」

「魂に於いて一度死を超えた者には、

槍も矢も通らない」という言葉は、

イエスが説いた

マタイによる福音書16章25節

「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、

わたしのために自分の命を失う者は、

それを見いだすであろう。」

という教えに導いてくれるものです。

この事から、

どのような道德観念も最終的に到達する所は、

一つの絶対的な真理であるという事を

知ることが出来ます。

以上の事から、

切腹が乱用された事実があったとしても、その切腹自体は決して忌むべきものでも、

野蛮なものでもなかったという事をご理解頂けた事と思います。

◆ 正義の天秤として用いられた敵討ち・復讐

切腹と、ある面姉妹的な位置づけにある敵討ち・復讐の風習ですが、ここに如何なる美点があったのかを見ていきたいと思います。

例えば、

結婚という概念の無い原住民の中に於いては、姦淫は罪として定義されません。

そこでは、伴侶の嫉妬心が、

不倫を防ぐ防波堤の役割を担う事になります。

また、

裁判制度の無い地域に於いては、

殺人が犯罪として立件される事はありません。

この場合も、

殺された家族が抱くであろう、復讐心に対する恐れが、犯罪の抑止力となるのです。

世界的にも、「親の仇」というものは、美談として扱われるのが常でした。

日本に於いては、それに「主君の仇」が加わる事でしょう。

ある面、単純で子供染みた、

「目には目を齒には齒を」という概念によって、まるで、数学の等式のように、両者の項が同じ様になるまで、人間は、やり残した感覚に陥るのです。

聖書に記される、

本心の愛を根拠とした《ねたむ神》の観念では、ある意味でのこの復讐という概念は、どこまでも、神を中心とするものとなりますが、

武士道に於いては、

人間社会に於ける一種の道德法廷として、この復讐・敵討ち制度が用いられ、その用途は、個人的感情によるものではなく、あくまでも正義に基づいて行われてこそ、評価されるものであったのです。

例えば、

スコットランドの政治家、ジャームスハミルトンが、

妻の墓から土を取り、常に持ち歩き、妻の敵討ちの為の励みとした、自己中心的復讐心は武士道に於いては軽蔑されるものでした。

しかしこれは、

近代刑法が整備されたことによって、その役割は、国家権力としての裁判と警察に移行し、刀文化は必要ないものとなりました。

もし、

これまでお話した敵討ちと切腹が、狂乱に満ちたものであれば、

この社会体制が整備された事だけで、突如として消え去った事の説明が付きません。

私は今、

全く変わった形として登場した「自殺」、その数の急増を危惧しています。

単なる自殺と、切腹は、

全く中身の異なるものでした。

ある面血生臭い、日本独特の刀文化が、実は、道德観念の縦軸を担ってきた事を

◆ 刀は、侍の魂

マホメットは、

剣とは、天国をも地獄をも

生み出すものであると言いましたが、

この概念に通じるものが武士道精神にはあり、

日本に於いて刀という存在は、

魂と勇気の象徴とされていたものだったので。

武家に生まれた子供は、

5歳で侍の正装を着る様になり、

七五三の祝いで刀を持たされるのです。

普段持ち歩くのは銀塗りの木刀ですが、

程なくその子供は本物の刀を常に差すようになります。

その試し切りの遊びに明け暮れるのは、

当たり前の風景でした。

15歳で元服し、独り立ちすると、

大人と同じ高級な真剣を与えられ、

それに伴い責任感も増す様になります。

刀と脇差はいつ如何なる時も身に付けており、

護身用に夜でも枕元に備えていました。

刀に対して、

まるで友人の様に愛称をつける事もありました。

その様にして、侍と刀の関係性が

深まっていくにつれて、

刀は崇拜対象にまで引き上げられる様になったのです。

遙か昔には、コーカサス地域のスキタイ人が、

偃月刀を崇拜して、

生贄まで捧げていた事がありました。

同じように日本の神社や家庭には、

尊崇対象として刀が秘蔵されるものであり、

いくらかでもある小刀にさえも

一定の敬意が表される文化が根付いたのです。

その為、

刀をうっかり足でまたいだだけで、

親に怒られる事がよくあったのです。

◆ 日本刀に宿る靈魂

これだけ刀が大切に扱われる様になれば、

その刀を作る職人たちも、その職人魂に火が付きます。

平和な時期になると、

刀はまるで、装飾品の様になっていきました。

そうなるにつれて、

刀に対する恐怖感も無くなる様になりましたが、

その様な装飾などはあくまでも、

刀本体と比べれば、

おもちゃの様な位置づけにあったのです。

刀の職人は一日を身を清めるところから始まる、

まるで靈感を受けた芸術家のような人々だったのです。

名刀からは、芸術以上の何かを感じるものです。

刀鍛冶たちの靈魂が吹き込まれ、

その様な魔力を

帯びるようになるものなかもしれません。

美しさと強靱さを兼ね備えた、

極まったデザインは、誰もを魅了します。

◆ 平和こそが、武士道の理想

刀がただの工芸品なら良いのですが、

その武器としての本質がある故に、

身近に刀がある事で、

乱用を生み出してしまふ事もありました。

しかし、

武士道精神がその様な乱用を許していたかと言えは、断じてそのような事はないのです。

その様な人は、卑怯者であり、臆病者である、と言われていたのです。

冷静沈着な侍は、人生に於いて、

その刀を殆ど抜くことはありませんでした。

勝海舟は、

刀を持ちながらも布で堅く覆い包み、抜けない様にしていました。

自ら手を下して殺めた相手が、実は罪が無い人かもしれぬ。

自分自身が暗殺されずに済んだのは、

その様に徹底して、

自らの手で人を殺める事が無かったからだ。という精神を貫き通しました。

これは、

「負けるが勝ち」

「血を流さない勝利こそ至高の勝利である」

という格言に通じる内容であり、
これこそが、武士道の真髄なのです。

しかしながら、
侍たちが、

この様な武士道精神の理想についての学びよりも、
日々の稽古や訓練に明け暮れていた現実があった事は、
非常に残念な事です。

一方で、

この武士道が、
女性にとってはどのような道徳観念であったのか、
女性への教育や、
その家庭・社会的地位について
次項でお話したいと思います。

第14章 武士道が示す女性の在り方

◆家庭的であり勇敢である事が女性の理想像

女性の直感的性格は、

時に矛盾の典型ともされますが、

それこそが、

男性の数理的思考を

超越した特長に起因するものであると言えます。

「妙」という字には、

不思議で神秘的という意味合いが含まれますが、

これは、

「女」と、

若いという意味の「少」が合わさったものとなっております、

女性の美観や繊細な思考を

意味するものとなっております。

これらの分野は、

男性の思考回路では

なかなか理解しにくいものがあると

言えるかもしれません。

日本に於ける女性に対する基本的な考え方は、「婦」という漢字が

箒を持った女性を表している事からも、他国と同様に家庭的であると分かります。

ちなみに、英語の

妻 (wife) は、織り手 (weaver) が語源で、娘 (daughter) は、

サンスクリット語の乳搾り (dhitari) から来るものです。

武士道とはそもそも、

男性の道德観念として出来たものでありましたが、その観念が、武家を中心に、

女性にも形を変えて適用されるようになる

自ずと若い娘たちにも、

忍耐力、精神力、武術などの訓練が行われる様になりました。

しかし、

これの活用は、戦場ではなく、

家族を守る事に目的があり、

男性の武士道に於ける、主君への忠義は、

夫に対する忠誠と、

我が身の純潔を守る精神に形を変えて適用されました。

◆女性の忠義の極致・純潔を守る覚悟

女の子は成長すると、親から

もし、自分の貞操を守れない状況に陥ってしまったら、
と言って

懐刀を与えられるものでした。

具体的にどの様にすれば自害する事が出来るのか、
また、屍が無様にならない様に、

死後も姿勢を保つ方法など、

その詳細まで具体的に教えられていました。

自殺を認めないクリスチャンから見ても、

これを責めようという事にはならないでしょう。

江戸時代の銭湯の仕組みや、

一部の事案や噂を取り上げて

日本人は、貞操観念を持たない

野蛮な民族と見る風潮がありますが、

それは全く逆で、

日本人、特に侍の妻たる者は、

自らの命以上に自身の貞操を守り抜いたのでした。

鳥居与七郎の妻は、

暴行から逃れられない状況になった時、

家族への手紙だけ書かせてくれたら

この身を委ねると言い、

手紙を書いたのですが、

書き終わった途端に井戸に向かって走り出し、

身を投げたのでした。

手紙の最後には

「世にふればよしなき雲もおほふらん

いざ入りてまし山の端の月」

と、自身を月に喩えて、

辱めを受けるくらいなら死ぬ、

という覚悟が綴られていたのです。

◆ 上品な言動や、芸事を身に付ける意味

ここまで述べてきた様な、

ある面男性的な武士道精神だけが

女性たちに求められるものではありませんでした。

上品な言動や、芸事を身に付ける事も、

大切な事とされ、

子供のころから様々な稽古を付けられるものでした。

我が国日本に於ける、これら芸事の目的は、超絶技巧や、芸術的高みを

ただひたすらに目指すようなものではなく、その目的は、

日常に彩りを加えられれば十分とされるもので、西洋の様な、

贅沢や見栄を張る道具ではありませんでした。

そして何より、

美しい芸事の一つ一つを身に付ける事には、

自ずと、精神の修養も伴う、

という概念が中心にあったのです。

芸事は決して見世物ではなく、

あくまでも家庭内の楽しみとしてあるものであり、

人前で披露する事はあっても、

それは女性の務めとして客をもてなす、

その一環に過ぎないものだったのです。

◆ 自体責任で身を捧げる女性たち

日本の家庭に於いて、

女の子への教育の根本にあるものは、如何に家庭を治めるべきか、という所に集約されるものでした。

芸事を身に付ける事もしかり、種火を絶やさない事もしかりです。

種火が消えてしまったら、近所の家に貫いに行くものでしたが、

それは妻として、家庭として恥ずかしい事とされてきました。

昼夜を問わず、父、夫、息子たちの為に、

ひたすら犠牲の道を率先するのが日本人女性たちの本分であり、

その一生に於いて、独立する事はなく、常に何か仕える人生で、

その目的観は常に、家庭を守る事に一貫していました。
木村重成の妻は、

豊臣秀頼公の為に死をも厭わず戦おうにも、家に自分が残っていては、

生きて帰りたいという雑念が沸いてしまうのではないかと案じ、

遺書をしたため、自害した、
という事がありました。

夫の助けになるのならば、妻はどこにでも赴き、
邪魔になるなら、後ろへ退く、
そういう精神を持っていたのが、

日本人女性の家庭に於ける武士道だったのです。

◆ 女性は男性の奴隷ではなかった。

「内助の功」の精神

男性が主君と国家の為に、死をも厭わない様に、
女性は、家庭の為に犠牲となる、
という事が、立派な人とされてきました。

この「自己犠牲」の境地を理解する事が、
日本人の在り方、
特に女性を理解する唯一の糸口と言っても
過言ではありません。

この自己犠牲精神は、
男性が、その主君の奴隷状態では無かった様に、
女性も、男性の奴隷状態にあったわけではありません。

この事を的確に表現したものが「内助」なのです。夫の為に、内側から支え助けるのが女性であり、夫は、主君を支え、助ける。という構造がありました。男女ともに、主体に対する、対象としての犠牲精神を堅く持っていたのです。

この武士道精神は、仕える相手、主体が、あくまでも地上の人間という次元の話ですので、万民がみな、霊界の神に対して一律に責任を負っているという真理を説いたイエスの教えには劣るものではありませんが、概念の特徴としては、武士道が説く犠牲精神は、このイエスの教えに通じるものがあると言えるのではないのでしょうか？

昨今、欧米の女性解放運動家が、日本人女性は悪しき風習を絶ち、自由になれ！と叫んでいましたが、

ここまで述べてきた自己犠牲精神を持つ日本人は、

その西洋の軽はずみな活動に賛同する事は無いでしょう。

そもそも、
うわべだけの、作られた活動で、
虐げられている者の地位が
本質的に向上するとは言えません。

それに、彼らが言う理想がすべて実現したとして、
それは、日本人女性たちが昔から代々受け継いできた、
あの愛らしくおしとやかな性質が、
この世から消えてしまう事と
釣り合いの取れるものなのではないか？

古代ローマの崩壊は、
女性たちが家庭を顧みなくなった、
道徳的退廃によって起こった事でした。

この様に、
その結末は歴史が既に証明しているのです。
欧米の活動家たちは、
日本人女性たちの反乱が、
この国の歴史的発展に繋がるものだと
本当に保障出来るのでしょうか？

この事は、余りにも重大な問題です。

変化というものは、
誰かが作為的に、策略を以て引き起こさずとも、
もし本当に必要であれば、
自然発生的に起こるものなのです。

◆ 武士階級で女性たちが持っていた地位

日本に於ける女性の地位は、
西洋人が言う様に、
本当に最悪なものであったのでしょうか？

弱者である女性が、
封建社会に於いてどの様な扱いをされるかについては
各所で様々な議論がされてきたことですが、
ハーバートスペンサー氏が述べた、
一つの結論としてあるのは、

「封建制・軍事社会では必然的に女性の地位は低くなり、
産業化された社会に於いては
女性の地位は自然と改善されていく」
というものです。

欧州の騎士道に於いては、

レディーファーストの、
ジェントルマン文化があったと見られています、
イギリスの多くの歴史家、
ギホンやハラムなども言っている通り、
騎士道に於ける女性に対する表面的敬意は、
下心を持っていたもので、
本質的に女性の地位が高かったとは言えません。

日本に於ける社会階級は、
貴族階級、武家階級、
一般庶民（農・工・商）の3つに分類できますが、
これらの内、
スペンサー氏が指摘した軍事社会である武家階級は、
日本に於いては200万人程度に過ぎない一部であり、
貴族と庶民社会では、
基本的に男女の差は目立たないものでありました。
ちなみに、日本の貴族社会でこの様な形になったのは、
ある面、暇を弄ぶ階級でもあったことから、
全体として性格が女性化したのが
背景としてあったと言えます。

この様な観点で見ると、

スペンサー氏の言う女性の地位問題があったのは、我が国日本に於いては、ごくごく一部であったと言えます。

しかし、

日本の武家社会に於ける男女の差異は、果たして、スペンサー氏や西洋学者の人々がいう様な、「不平等」と言えるものだったのでしょうか？

本質的に物事を捉える目があれば、

それぞれの「位置」と、その中身を満たす事により生じる「価値」を軸に社会が回っている事に気づく事でしょう。

アメリカ独立宣言も、万民は平等に創造されていると謳っていますが、それが、知能や身体的な所まで同じと言っている訳ではありません。

法律の元で、万民は平等であると言ったに過ぎません。社会に於いて本当に完全な平等と言える場面は、法廷や投票などの、ごくごく限られた場面であるのです。

では、

法律の前に万民が平等であれば、それは理想の社会であるのかと言ったら、

それは余りにも安直でしょう。

その様な人為的な枠組みには、

人間それぞれが生まれ持つ

「個性の価値」が含まれない為です。

男性と女性はそれぞれ、

この地上に於ける使命を全うする為に、

一人一人が多種多様な要素を備えています。

男女の地位について、それを計る基準は、

一面的なものでは無く、

複合的なものでなければなりません。

その複合的視点として武士道が用いたのが

「家庭」と「戦」という2つの視点でした。

武家社会に於いて、

戦の視点では女性は重要視されませんでしたし、

女性を戦に駆り出すなどもっての他です。

この点では男女不平等と言え、そうでしょう。

しかし、

家庭に於ける女性の地位は、高いものであり、

最大の尊敬を受けけるものでした。

夫が戦に出る際には、

家庭内に於ける一切の権利は、母に委ねられたのです。

子供の教育はもちろん、

家の防備まで、多岐にわたります。

生半可な日本文化理解で、

「愚妻」という一言を取り上げ、

日本の女性の地位は悲惨なものであると言う

海外の論調がありますが、

これについては、

「愚父」「豚児」「拙者」が

今日でも広く使われている事を示せば簡単に
間違いであると証明できます。

私は時折、

クリスチャンを自称する西洋人よりも、

日本人の結婚観こそが、

イエスの教えに肉薄したものではないかと感じます。

創世記2章24節に

「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、
一体となるのである。」

と記されている様に、夫婦は一体であるべきなのです。

しかし、西洋に於いては、徹底した個人主義が根付いており、夫婦はそれぞれ別人格であるという観念からなかなか抜けられず、夫婦で争う時も、2人それぞれの権利が認められています。

それ故に、日本人が自分の妻を褒めるのは、自分を褒める自画自賛と同じ意味となってしまうので、

「愚妻」

そして、「愚父」「豚児」「拙者」という概念が成り立つのです。

これらの呼び名が、決して礼を欠いているものではなく、むしろ、

礼を極めた先にこの概念が生まれる事をご理解いただければ幸いです。

◆ 倫理観が導く日本人の愛情関係

欧米に於ける、男女に関する道德観念は、男性よりも女性の数が少ないという

繁殖に係る情勢に起因するものでありましたが、

日本に於ける男女観は、

本書冒頭で述べた「五倫」

つまり、人と人は魂で結びつくという概念、道理に起因するものでした。

ここまで、五倫については、

忠義の内容、主君と家臣の関係を特筆し、

その他は付随的に扱ってきたのですが、

それは、

武士道に於ける最も主軸となるのが忠義であったのと、

その他の人間関係は、自然に培われるものであり、万民に共通する為でした。

万民共通と言っても、

武士道の文化によって増幅された愛情関係がいくつかあります。

一つは、男女の愛情です。

「男女七歳にして席同じくせず」や、女性が命に代えてでも守った貞操故に、男女の出会いと愛情は、一層神秘的なものとなり、高潔なものとなったのです。また、男性同士の愛情関係、絆も、ひとときわ輝くものでした。

これは時には、異性恋愛よりも強烈なものがあり、ギリシャ神話のダモンとフィシアスや、アキレスとパトロクロス、聖書に記されるダビデとヨナタンの絆の物語に勝るとも劣らない男同士の物語が日本には数多くあります。

これらの様な、武家階級の縦軸となっていた武士道は、侍のみならず、日本国民全体に、様々な形で行き渡り、日本独特の伝統文化を形成したのです。その詳細について、次項でお話したいと思います。

第15章 武士道が完成させた国民道徳「大和魂」

◆ 民衆の倫理観の縦軸となった武士道

武士道精神は、一般庶民の日本人の水準の、遥か上をいくものですが、

朝日が山頂を照らし、

やがてその光が裾野へと広がっていく様に、

武士道精神は時を経て、

「大和魂」という全日本国民の道徳観念を

その極致にまで引き上げたのでした。

人間がその本心を抱く限り、

美徳も、悪徳に負けないくらい強い伝染力を持つものなのです。

自由主義を勝ち取ったアングロサクソンですが、

この動きの発端も、一般大衆という事は極めてまれで、主には貴族階級、

いわゆる紳士 (gentleman) が導いていたものでした。

大衆の間で語り継がれる

芝居、寄席、講談、浄瑠璃、小説などは、侍たちの話題が展開されて作られていました。

「花は桜木、人は武士」という言葉が
すべてを物語っています。

農民は毎晩のように、
飽きる事無くその話題に興じて、のめり込み、
自らの心をも燃やしていたのです。

幼い子供たちには、まだ活舌の悪い頃から、
桃太郎の話聞かされるものでした。

日本人の知性と、道德観念は、
侍たちによってけん引されてきたのです。

これらの事について、
聖書を基にこの様な反論をする人が
居るかもしれませぬ。

「人類の父母、アダムとエバが墮落した時、
その2人を導く紳士がどこにいたのか」と。
確かに、エデンの園に居たのが紳士であれば、
2人はその紳士にただ追従するだけで、
正しい道を歩めるようになります。
ですが、そうなれば、

神に反逆し、悲劇が展開されるきっかけとなった
あの事件は

そもそも発生する事もなく、
ある面、人間の意思決定と関係無く
自動的に平和な世界になっていた事でしょう。

ともあれ、

古き良き日本の文化は、
侍による武士道が醸成したものでありました。
侍たちは、

大衆の平和と安寧を願い、
自らが武士道の手本として立ち、
その規律で人々を導いたのです。

◆ 大和魂を具現化した「武士道」と「桜花」

昨今はその多くが本来あるべき形から
逸脱してはいますが、

「任侠」に於いて、

子分は、名誉もお金も自分自身もすべて、
親分に託す伝統がある事から、
武士道精神が、

日本社会の隅々にまで行き渡っていた事が伺えます。

そしてこの親分たちは、一部、收拾のつかない侍たちの横暴に対して抑止力を持つ正義の存在とまでなっていたのです。

武士道は、その母体となる武家階級から、ありとあらゆるルートを辿って形を変え、酵母のように各所で発酵し、日本全体の道徳律、大和魂を完成させていったのです。必ずしもその全てが、武士道精神の極致まで達していなかったにしても、この「大和魂」は、日本人の代名詞とまでなったのです。宗教でないながらも、これ程までに民族の道徳観念に影響を及ぼしたものは世界のどこを見てもないでしょう。

本居宣長は、日本人の心情を

「敷島の 大和心を 人間はば 朝日に 匂ふ 山桜花」と歌いました。

桜こそが、日本国民の民族性の象徴であったのです。ヨーロッパで賞賛される、美しさの中に棘が潜むバラとは違い、

桜には、繊細な美しさと強さがあります。また、バラは、生にしがみつくかの様に、朽ちるまで枝に付いています。桜は、もっと咲いて欲しいと思う、一番美しい時に潔く散り、大きな感動を人々に与えるもので、この点も、武士道精神と一致する所です。

そして、強烈ではない、ほのかな桜の香りも、日本人の国民性に同調する美しい特性と言え、この香りにつられて人々は桜のもとに集い、そこで苦しみや悲哀を忘れ、新たな心で再び仕事に戻るのです。

それは、ノアが捧げた燔祭の香りを嗅いで、その御心に新たな決意を固められた創造主の姿を思わせるものです。

もし、この桜こそが

日本の武士道精神・大和魂の典型であるのならば、桜がほんの一瞬、その香りと美しさを放って、すぐに散ってしまいう様に、

第16章 武士道が歴史をかけて到達した所とは

◆ 武士道が培ってきた、大きな力

もしも、武士道精神が、

西洋の荒波にもまれ、

いとも簡単に消え去ってしまう様であれば、

それは、貧弱な倫理体系であったと

言わざるを得ません。

アメリカの思想家エマソン氏は、

「各国の有力者を引き寄せ、互いに協調する要素とは、

一人ひとりが秘密結社（フリーメイソン）のような

目に見える印を失っても、

直ちにそれだと判別できる、明確なものである」

と言いました。

つまり、生き物には、

鳥で言えばくちばし、

魚ならヒレ、

ライオンならたてがみの様な、

その種にとって、欠く事の出来ない、

主軸となる要素があるものですが、

日本人にこれを当てはめれば、
武士道精神と言える事でしょう。

これだけ長きに亘って培われてきた日本人の精神を
簡単に消滅させる事などできません。

ここまで、武士道の歴史について見てきましたが、
時折、その要となる徳目について、

西洋文化として主に

イエスの教えとの比較を行ってきました。

ここから分かる事は、

武士道精神の特質や美点は、

武士道の専売特許では無く、

万民共通の、この宇宙を貫く一つの真理に
限りなく近づいたものであるという事です。

◆ 日本を近代化に導いた武士道

武士道は理念体系として形は整えていないながらも、
日本人一人ひとりの心の中に根付き、
その原動力となりました。

吉田松陰が処刑前夜に歌った

「かくすればかくなるものと知りながら

やむにやまれぬ大和魂」こそ、

日本人の心の叫びと言えるものです。

一部の宣教師は、

新生日本の建設は、

自らの布教活動によるものであると主張していますが、
私もクリスチャンなので、

彼らの働きは評価しますが、

裏付けのない根拠で、自分の栄光を振りかざすのは、
そもそも聖書の教えに反するものです。

佐久間象山や、西郷隆盛、大久保利通、

木戸孝允、伊藤博文、大隈重信、板垣退助らの
伝記を読めば、

外国貿易の解放、西洋学問や技術の習得、

王政復古の大号令などで様変わりした

この激動の日本をけん引している

一人ひとりの行動原理は、

武士道精神以外に無い事は明白です。

勿論、一人ひとりの中にある原動力の性質は
それぞれでしょうが、

その内で最大の物は何かといえは、私は迷うことなく武士道を挙げます。

単なる西洋の模倣や、金銭欲によるものではありませんでした。

メレディスタウンSEND氏は

日本人の原動力は、

その内なる力にあった事を見抜いて、自身の著書で、

「我々はよく、欧米が如何に

日本に影響を及ぼしたかの論説を聞かされるが、彼らの発展はあくまでも自発的なものである。

欧米人が彼らに教えたのではなく、

日本人が自ら欧米の政治や軍事を学んだのだ。

そしてこれが、現時点では大きな成功を収めている。

これは影響を受けたという表現は相応しくない。輸入である。

イギリスが中国の茶葉を買ったからと言って、中国の影響を受けている事にならないのと同じだ。」と語っています。

もし、タウンSEND氏が日本についてより深く研究していれば、

その源泉は「武士道」であった事に
すぐ気づいた事でしよう。

欧米諸国から、
劣等国と扱われる事に耐えられなかった名誉心、
これが最も大きなものであり、
それが原点となって、
殖産興業という思想が
我が国日本に於いて生まれたのです。

◆ 小柄な日本人が持つ不屈の精神・忍耐力

欧米が日本人をバカにして、
「小柄なジャップ」と呼びますが、
その小柄な日本人たちの
忍耐力や不屈の精神、勇敢さは、
日清戦争で十二分に証明された事でしよう。
日本人以上に愛国的で忠実な国民は、
世界のどこにも居ません。

しかし、ここで

武士道精神により生み出された

日本人の国民性の欠点にも触れなければ
公平なものとは言えないでしょう。

それは、「名誉心の暴走」と言えます。

原因は、武士道教育に於いて、
思考に関する

教育が疎かにされてきた事にあるでしょう。

日本で旅をしていると、

粗末な見た目で、本や杖を持ち、

世俗を絶った風貌で歩く

若者たちの姿を見かける事があるかもしれません。

彼らにとっては、

地球はあまりに狭いもので、

いつも独自の世界観に浸り、

大志に燃えながらありとあらゆる知識を

渴望しているのです。

その様な事を考えるあまり、

一切の世俗や贅沢は彼らにとって

足かせとなるのでした。

彼らは、忠義心と愛国心の権化とも言うべき存在で、

日本国家の名誉の守り人とさえ自負しています。

彼らの良い所も悪い所も、

武士道の残滓と言えるでしょう。

◆ 武士道が持つ、歴史の重み

日本人の心情は、武士道により醸成され、何か説得される事について、

あまり理屈が通っていなくても、

古くから継承された観念であるとなれば、

それに呼応してしまいう性質があり、

無意識的な、

無言の感化力とも言うべきものがあります。

中身がたとえ同じであったとしても、

その単語が、古くから使われるものであれば、趣を感じ、

新しい言葉は何かと通じないものなのです。

あるクリスチャンが、その道から外れ墮落した時、

牧師が、イエスに対する忠誠、

その初心を忘れたかと問うた事で、

即座に回心したという出来事がありました。

「忠誠」という一言が

その日本人を回心へと導いたのです。

また、新任の教師にボイコットする生徒たちに対し、

校長先生が、
君たちの弱者を虐める行為は「男らしくない」
と言ったとたんに、
素直に解散した、という事があったそうでした。
武士道精神に基づく、自身の男らしさを問われれば、
教師の良し悪しなどは、
彼らにとって小さな問題になってしまったのです。

キリスト教の伝導が、
我が国日本に於いてなかなか広がらないのは、
これについての認識が、
宣教師たちに不足していたからと言えるでしょう。
彼らに言わせれば、
異教徒の功績など取るに足らない。関心もない。
という事でしようが、

その様な姿勢では何も始まりません。
私は、文字も文明も歴史もない
アフリカの原住民生活も、
神の手によって描かれた
歴史の1ページであると同信しています。
すでに絶滅して、この世に無い文明の遺跡も、

賢明な歴史家にとって、
解読すべき古文書となるのです。

特権思想に浸る宣教師たちは、
各国の歴史を無視し、

キリスト教を新たな宗教として主張しますが、
彼らが主張する、

最早キリスト教と言えないその宗教は、
私に言わせれば、

カビの生えた古臭い話なのです。
各国の歴史に寄り添い、
馴染みのある言葉で、

イエスの教えそのものを説けば、
万民は自ずとそれを受け入れる事が出来ます。

そうしてこそ、イエスの教えは、
人々の心に宿る事が出来るのです。

つまり、
本来のイエスの教え、
創造主の恩恵とは全く別物の、

アングロサクソンの気まぐれと空想で作られた宗教、
キリスト教は、

武士道という幹に接ぎ木するに足りない、
貧弱な芽と言わざるを得ないという事です。

宣教師たちは、

西洋の理想と、東洋の腐敗を比較し、公平さを忘れ、独善主義に陥りました。

布教とは果たして、その地を荒地にし、無の状態にしてから種を撒き、新たな世界を作るものなのでしょうか？

ハワイでは、その所業を行い、成功を収めたと主張する彼らでしようが、少なからず日本に於いては、不可能でしょう。

それに、イエスがもし、志半ばで絶たれる事無く、ご自身でこの地上に

神の国を立てる事に挑戦していたなら、最大限に過去の蓄積を活かす筈で、決して白人たちの様なやり方は取らない事でしょう。

武士道の未来、私たちの未来を考えるに於いて重要な事は、

これら腐敗したクリスチャンが回心した先に行きつくであろう、

イエスの教えの根本原理である「愛」こそ最終的な一大勢力になるであろう、という事です。

第17章 日本人は武士道精神を復活し、

ヘブライズムの道を進まなければならぬ

◆ 武士道は消滅してしまふのか…

歴史は繰り返すと言われますが、

ヨーロッパの騎士道と、日本の武士道ほど、

歴史的に比較できるものはなかなか無いのを見たら、
武士道も、騎士道と同じように
消え去ってしまったのでしょうか。

騎士道が滅亡するに至った原因は、
かなり特殊であった為

そのまま日本に当てはまるものでは無いでしょうが、
武士道は今、それを遙かに超える
大きな脅威に晒されています。

騎士道は、封建制の終わりと共に、
キリスト教に吸収されましたが、

武士道には、

それを庇護出来る大きな宗教が存在しません。

その為、母体である封建制が無くなれば、
まるで孤児の様に

自力で生きなければなりません。

現代の日本軍が、

その母体になり得るといふ見方もありますが、現代流の戦争は、

武士道を成長させ続けられるものではないでしょう。

神道も、諸外国に見る様に、社会の流れに迎合し、快樂主義的な道德論を与えるに過ぎないものとなってしまうています。

特に、一切の特権階級をも認めない民主主義体制や、一般教育の普及、技術発展、

そこから生み出される贅沢な都市生活は、

武士道にとってさらに生き残り辛い環境と言えます。

名誉を礎とし、名誉によって守られてきた名誉国家、スパルタや古代ローマなどが消え去ったように、

日本の武士道も、

永遠の存在とはなれないのでしょうか。

◆ 日本人が本能を開花すれば、侍に生まれ変わる

人間はだれしも「愛」といふ本能を兼ね備えています。

過去の義人聖人たちは、表現の方法は違えど、

結論としてこの「愛」の重要性を説いています。

しかし、

武士道は目前の現実には惑わされ、

この「愛」という本能を

ある面ないがしろにしてきました。

社会の発展により、生活の幅が向上した今、

侍の使命観よりも、

更に大きな社会に対する使命が求められています。

この人生観の広がりによって、

普遍的真理である「愛」に目が向けられるようになり、

その道德観念は増大され、

武士道がけん引してきた「臣民教育」から、

万民平等の「市民教育」へと社会の流れは変わりました。

そしてこれは、

「人間そのものを如何に捉えるかという教育」に

成長していく事でしょう。

この、人間が如何に在るべきかを突き詰めていけば、

どれだけ世界に暗雲が立ち込める状況になっても、

最終的に、

ヨハネの黙示録21章7節

「勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。

わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。」
という預言が成就される事になるでしょう。

武士道の終焉は、

1871年の廃藩置県が合図だったと言えます。

この5年後の廃刀令によって、侍を捨てた結果、
日本は、

「理屈ばかりこねる政治家、

金儲け主義、策略家」にとって生きやすい新時代を
図らずも迎える事になってしまいました。

さて、

日清戦争の勝因は、

村田銃とクルップ砲だと一般的には言われていますが、
それならば、

旧式の銃しか持たないフィリピン人に、
スペイン軍が勝てなかった事について

説明が付きません。

最高級のピアノがあっても、
名手が居なければ、

素敵な音楽を奏でる事が出来ないように、
要となるものは「人間そのもの」であり、

その精神力に帰結するのです。

日本軍が、鴨緑江、朝鮮、満州で勝利を勝ち取れたのは、私たちの祖先の、

武士道の靈魂があったからに他ならないのです。

これら靈魂まで消え去る事はありません。

見る目があれば、その事がしっかりと見える筈です。

今日、私たち日本人が預かっている武士道精神は、

先祖たちのものであり、子孫たちのものであり、

これは、誰にも奪う事の出来ない、

人類永遠の財産なのです。

我々の使命は、

先人から受け継いだ武士道精神を一滴たりとも零さず、

未来に受け継いでいく事、

そして、未来に生きる人々の使命は、

受け継がれた武士道精神を、

人生に具体的に応用展開していく事なのです。

◆ 武士道の次を担う哲学とは・・・

封建制と共に消えた武士道精神ですが、

それに代わる新たな哲学観念が、不死鳥の如く立ち上がり、

新生日本の未来を

けん引するだろうと言われてきました。

半世紀が経過した現時点では、

その予言は証明されつつあると見れるでしょう。

遠くない未来に、

この予言は現実のものになると確信します。

不死鳥とは、別のところから来るものではなく、

自分の灰から蘇生するものです。

ルカによる福音書17章21節

「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」

この言葉は、神国日本に於いて成就すべきものです。

しかし、

武士道の中に開花した、神の国の種は、

後世に残すべき実が熟す前に、

その時代が終わろうとしています。

にも拘らず、私たちは今のところ、

武士道に代わる哲学観念を見つけられてはいません。

昨今、魂を半分失ったかのような、「損得哲学」が人気を博してはいますが、これら利益主義や、唯物観念に対抗し得る強力な哲学は、今や、イエスの教えだけと言えるでしょう。

武士道は今、消えかかっているランプの光のようですが、イエスは、「彼が正義に勝ちを得させる時まで

…煙っている燈心を

消すこともない。(マタイ12:20)」と宣言されました。

旧約聖書に登場する、イエス登場までの数々の預言者の様に、武士道は、武家階級に重きを置きながらも、国民全体にまでその影響を及ぼしました。

ユダヤ民族がその歴史を経て得たイエスの教えは、全体としてではなく、個々人がそれぞれ神を信奉する観念でありました。今、民主化で個人主義が広まりつつある日本は、そのイエスの教えの拡大に、

拍車がかかっている状況だと言えるでしょう。

ニーチェの、自己中心的な道德観念は、ある面で、武士道に近い性質があります。

ニーチェ哲学は、その病的な歪みにより、イエスの教えについて、

自己否定的な奴隷哲学と断罪するものとなっています。

私は、

イエスの教えと、唯物論や利益主義は、近い将来、

人間主義のヘレニズム文明と、

神中心主義のヘブライズム文明という

古くから続く

二大対立構造に帰結するのではないかと考えています。

各種の道德律は、

このどちらかに吸収され、

そこで生き残りが図られる事になるでしょう。

ここで問題なのは、

日本に於ける武士道精神は、

人間主義と、神中心主義のどちらに付くのか、

という事です。

しかし、それ以前に、

武士道には、教義も経典もありませんから、それ故に、桜の花びらの様に儚く散ってしまうだけで日本人は終わるのでしょうか：

古代ギリシャから来る禁欲主義が、形式としては消え去りましたが、

その中身まで完全には滅び去っていません。

同じように、

武士道は、独立した道德体系としては、

封建制の崩壊と共に無くなってしまいう事でしょうが、その中身まで、

日本人の心から完全に消え去ってしまうとは思えません。

桜の花びらの様に四方の風に吹き散らされても、その香りで人々を豊かにしてくれる事でしょう。

何代か後、武士道の習慣や精神が消え、名前すら忘れ去られたとしても、

立ち止まって遠くを眺めれば、

一陣の風に乗って、日本の武士道精神は甦る筈です。

詩人クエーカー氏の美しい言葉と共に・・・

何処からかやってきた香りに、

旅人は足を止め、その心は豊かになる。

その天空の祝福を受け、喜びに満ちる。

●『武士道』 記者あとがき（日本復活戦略）

教育者、思想家であった新渡戸稲造氏は、かつての5000円札に肖像が描かれる程、日本の代表的な偉人です。

国際連盟事務次長、東京女子大学初代学長、東京女子経済専門学校初代校長を務められ、農業経済学・農学の研究にも携わるなど、その活動は多岐にわたるものでした。

名著『武士道』に於いて注目すべき点は、万世一系の下で2600年以上の歴史を経て培われた日本の美德、その集大成である「武士道」は、新渡戸氏がその人生の中で出会った至高の愛情主義者、イエスが説いた教えに帰結するものである。と、至る所で強調されている事でしょう。

そして最終章では、武士道精神を復活した日本人は、ヘレニズム文明：人間中心主義を選ぶか、ヘブライズム文明：神中心主義を選ぶかの選択が問われる、と

新渡戸氏は警告しています。

日本の愛情主義「武士道」は

長年の時を経て培われたものですが、古代日本の最初の国家、大和朝廷よりも遙か昔に、生まれは貧しく、

両親から3日間育児放棄されるほど親にさえ愛されず、社会情勢も悲惨で、

33歳の若さで無実の罪で虐殺されたイエスの生涯を踏まえると、

そのイエスが短命の内に説いた愛情主義は、正に神業であると言えるものであり、新渡戸氏がイエスの教えに惚れ込んだ背景を伺う事が出来ます。

新渡戸氏は、イエス本人と、本質を見失っているキリスト教会を

明確に分けて捉えており、どこまでも、

イエス本人が説いた純粹な『聖書の教え』と、日本が長年の歴史を培って集大成した

『武士道』を融合した

『究極の愛情主義』の意義と価値を教えてくれていると言えるでしょう。

実は、イエスの愛情主義精神と、

日本の愛情主義精神は、

新渡戸氏のみならず、

多くの日本人の心の中で繋がっていたものでした。

松岡洋右全権大使 国際連盟脱退時の演説

「人類はかつて二千年前、

ナザレのイエスを十字架にかけた。

諸君はいわゆる世論が誤っていないと、

果たして保証出来ようか？

我々日本人は現に試練に遭遇しつつあるのを

覚悟している。

ヨーロッパやアメリカのある人々は今、

二十世紀に於ける日本を

十字架にかけんと欲して居るではないか。

諸君！日本は將に

十字架にかけられんとして居るのだ！

しかし、我々は信ずる。確く確く信ずる。

僅に数年ならずして、世界の世論は変わるであろう。ナザレのイエスが遂に理解された如く、我々も亦世界に依って理解されるであろうと。」

外務省『日本外交文書』満州事変第3巻より

『日本』が聖戦を挑んだ、

白人列強諸国による500年に及ぶ植民地支配が、カトリック・イエズス会を作った

「タルムード信奉のカザールユダヤ人」の策謀から始まっており、

『イエス』が戦った我欲主義者も、

当時、大祭司律法学者と呼ばれた腐敗した

「タルムード信奉のユダヤ人」であったという、偶然か必然か、

その共通する歴史的背景を捉えると、

イエスと、日本は、

「愛情主義」を志し、

「歴史的に一貫した我欲主義勢力」に立ち向かった『同志』である事が分かります。

2000年前のイエスは、

たった1人で我欲主義勢力に立ち向かい、

十字架で虐殺されてしまいました。

70余年前の日本は、

たった1国で我欲主義国家群に立ち向かい、
東京裁判、大空襲、原爆など数々の悲劇を通過しました。

イエスの時と違う状況は、

イエスは地上から居なくなり、
言葉・教えだけを残したものの、

日本はまだ、何とか民族・国家として

残存しているという点であると言えますが、
それも今や、

戦後70余年かけて進められてきた

G H QのW G I P戦略により、

いよいよ国家存亡の危機を迎えています。

人類歴史を懸けた

愛情主義と我欲主義の戦いの決着は、
最後の砦とも言える

この『日本』の復活が成せるか否かに懸かっていると
言っても過言ではないでしょう。

日本復活は日本人にしか成し得ません。

新渡戸氏はこの名著の最後に際して、

「何世代かの後に、武士道の習慣や志が葬り去られ、その名前が忘れ去られたとしても、

どこか見えない山の彼方から、

日本人の武士道精神は

一陣の風によって運ばれてくる事でしょう。」

と、私達に語りかけ、

勇気付けて下さっています。

全ての先人たちの想いに応え、

孝行を果たさなければなりません。

国家存亡の危機に瀕する今こそ、

私達国民は、

一致団結して具体的に行動を起こすべき時ではないでしょうか？

『武士道』に記される、

世界で最も尊ばれる「イエスの教え」と、

「日本の武士道」、

この2つを融合した『究極の愛情主義』の志を、

新渡戸氏や松岡洋右氏などの諸先輩の様に、

国民一人ひとりが心に堅く抱く事が出来れば、

大東亜共栄圏の理想を挫かれた日本は今度こそ、

その究極の愛情主義理念・国境をも超え得る
普遍的真理を根拠に

世界を理想に導くリーダー国家へと
生まれ変わる事でしょう。

日本復活を現実的に成し遂げるべく、
その確固たる愛情主義理念を軸とした

「自給自立国家モデル都市プロジェクト」を
全国各地で推進しています。

日本の未来を考える会 広報室